Vol.8 ●とじこみスペシャル

COMICS & NOVELS!!

FANTASY LAND

ファンタジーランド



コミックと小説の新コーナー、絶好調です!!

RPGやAVGのようにハラハラドキドキ
コンピュータ・ゲームよりも面白いコミック
スや小説が読みたいっ!! そんな欲ばりなあ
なたのためのコーナーです!!

CONTENTS

FANTASY LAND

Wizardry®



テツ

性別：男
職業：戦士
属性：中立
性格：鉄火
種属：人間族

ウィザードリィ外伝 第2部

鳳凰の塔

第4話 「二人」 作/石垣環

●前回までのあらすじ／およそ150年の時空を超えてイヅモの国へと跳ばされた一行。そこで修業をつむショウは、鳳凰の塔に伝説の宝刀クサナギが眠っていることを知る。力及ばぬ者が手にしたときその者は滅びの道を歩むという名刀を求め、ヒダカミの国へと向かうショウとサンザ。僧侶のリィナと戦士テツを加えた一行はついに鳳凰の塔へと突入する！



＊「盗賊の短刀」：本来なら「悪」に属する盗賊以外は「忍者」に転職はできない。しかし、これを用いて秘められた「力」を解放することにより、「中立」の属性の者でも「忍者」になることができる。但し、滅多に手に入るものではない。



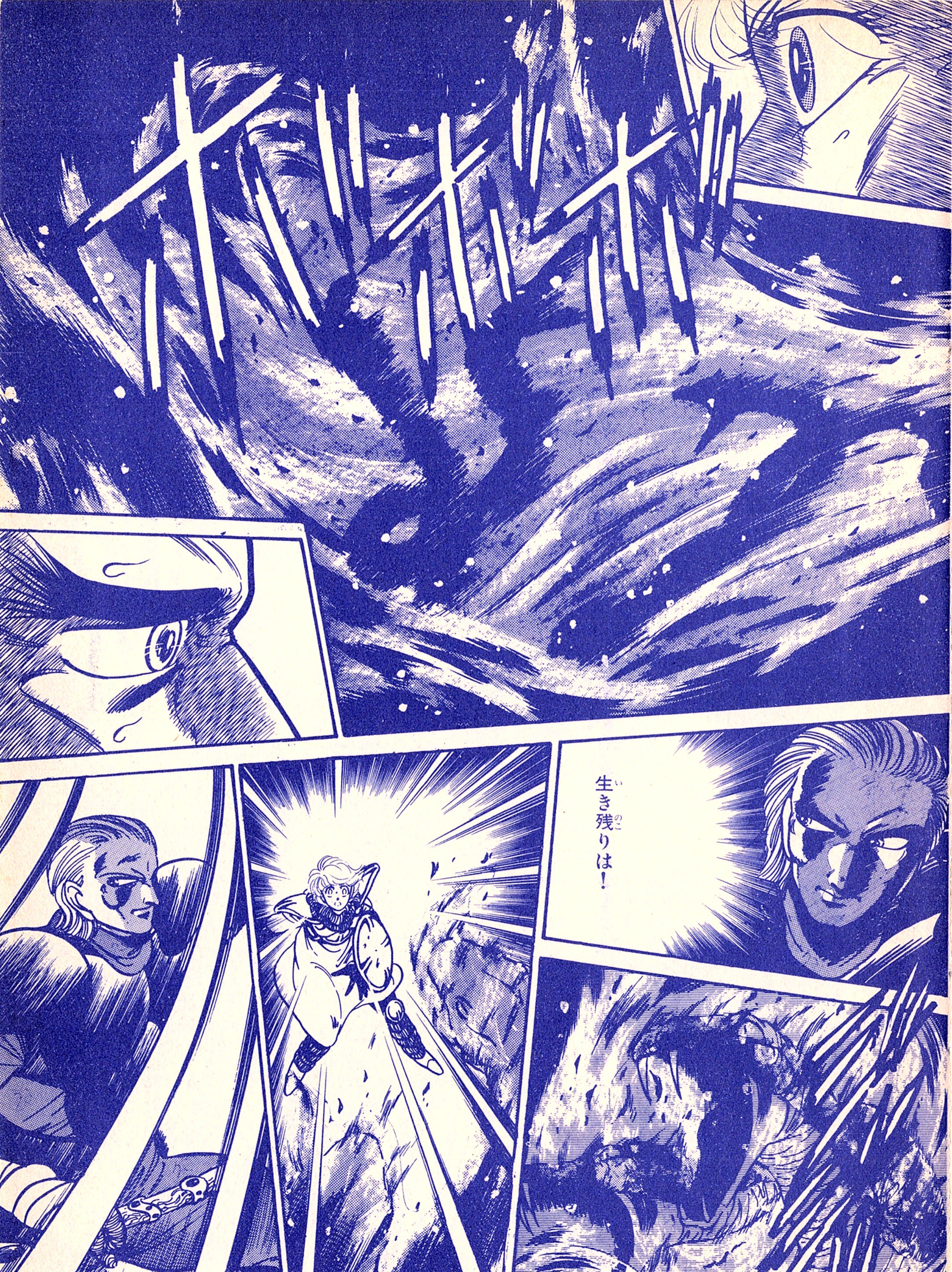
＊「属性判定師」によって、「善」「中立」「悪」の三つの属性に分けられ、それぞれ自らの戒律に従うことになる。簡単にそれぞれの傾向を説明するなら、「善」は自己犠牲の傾向が強い者。「悪」は自己中心型の者。そして「中立」は臨機応変型である。


双頭蛇か
囲まれたな
ああ どうやら 巣の中に 入り込んだ ようだな
お、おいおい そんな呑気な――
そうか こんな 奴らと 戦うのは 初めてか

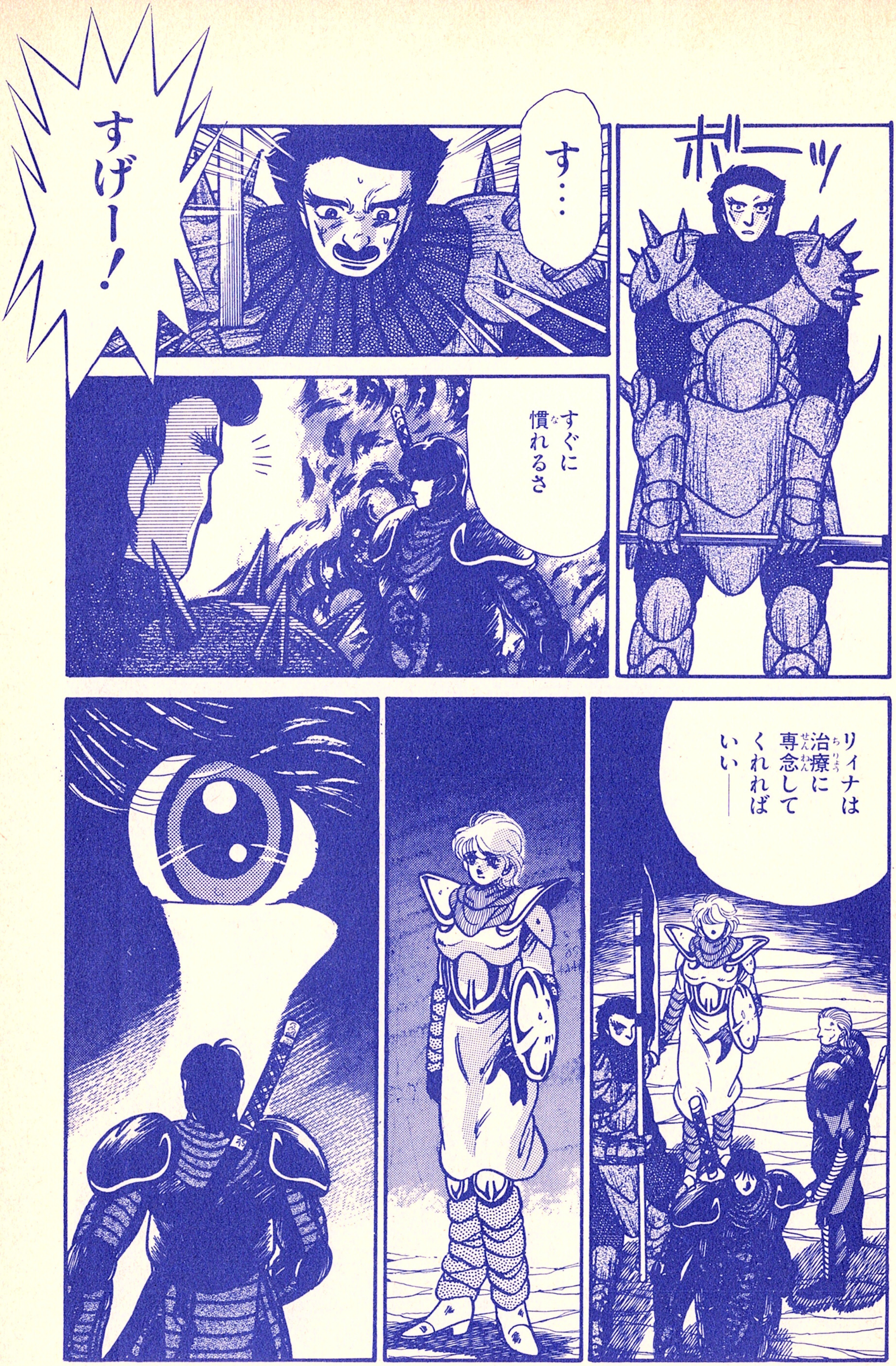


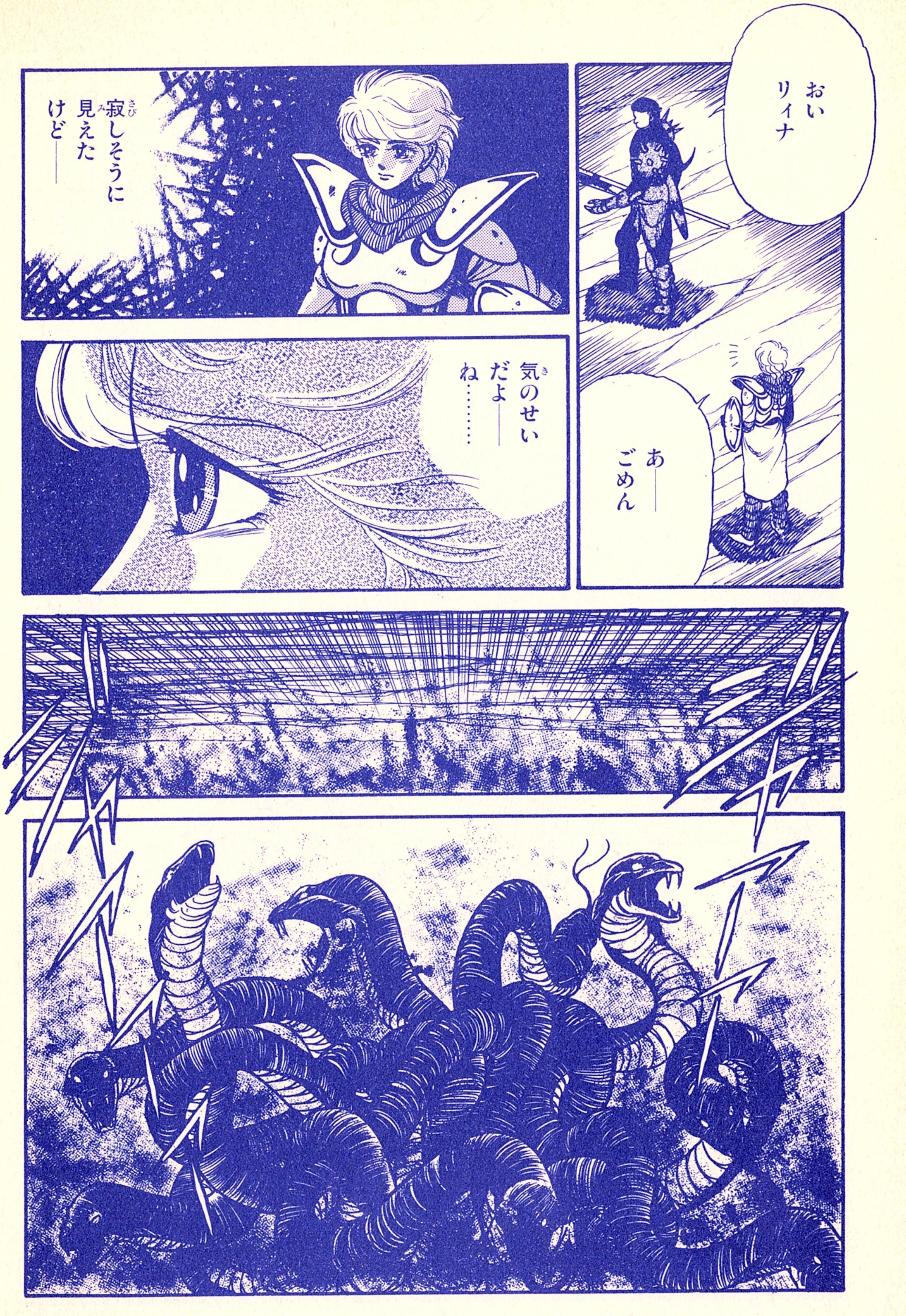
＊この世界の人間とは、「人間」「エルフ」「ホビット」「ノーム」「ドワーフ」の五種族の総称である。または「人」とも云う。

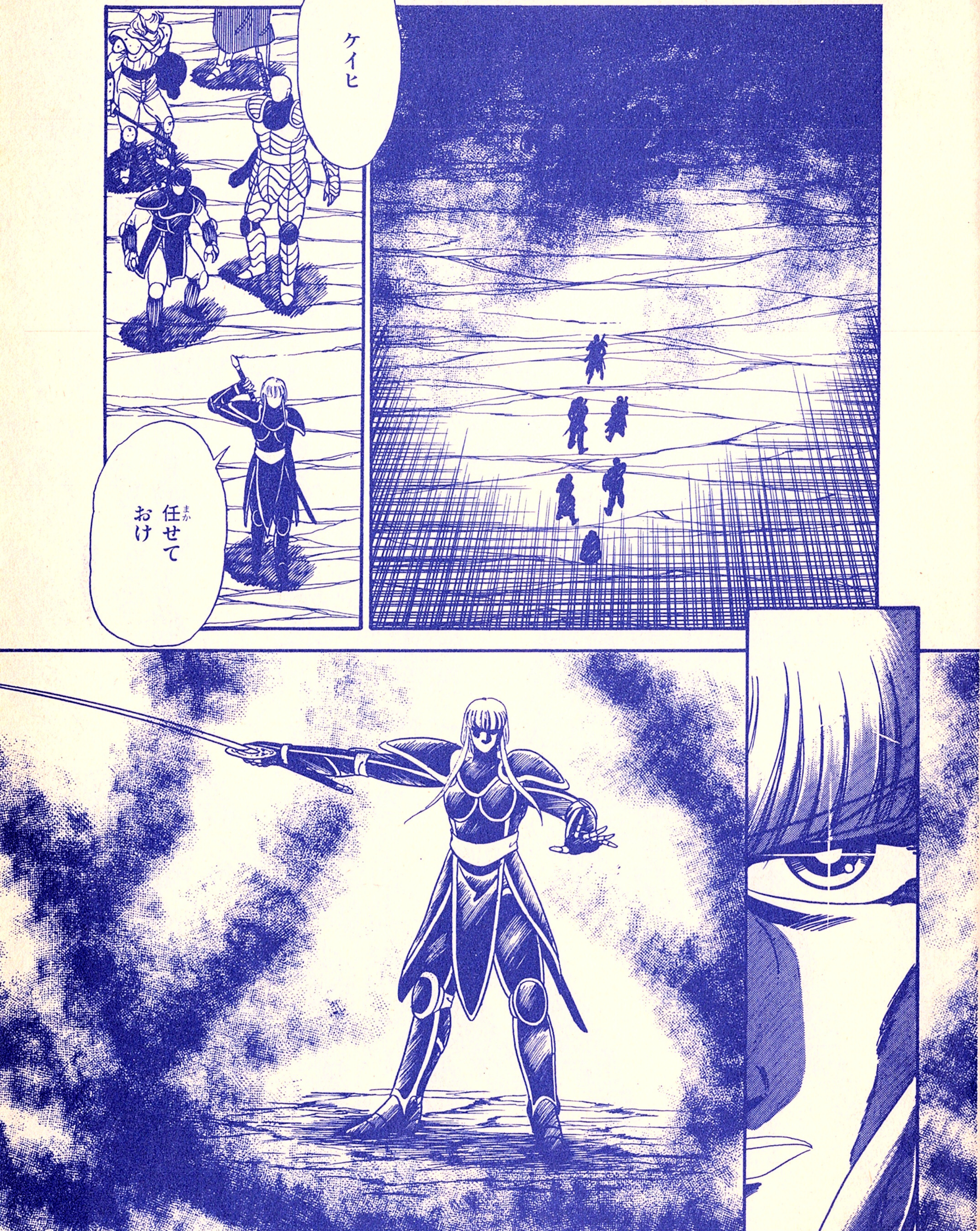

ラハリト
猛炎！

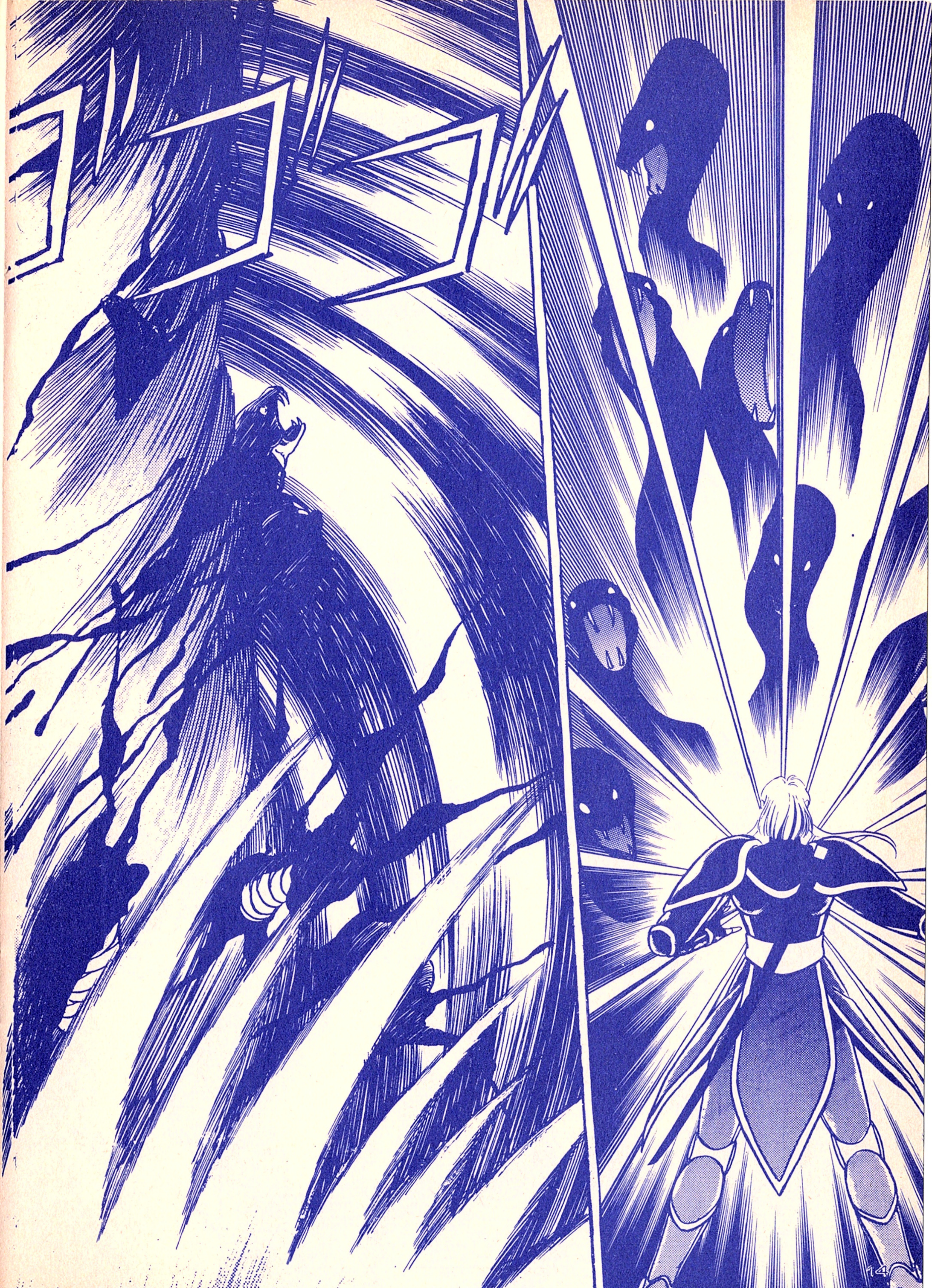

生き残りは！


パチッ
たわいない
な……


ボーッ
す・・・
すげー！
すぐに慣れるさ
リイナは治療に専念してくれればいい——

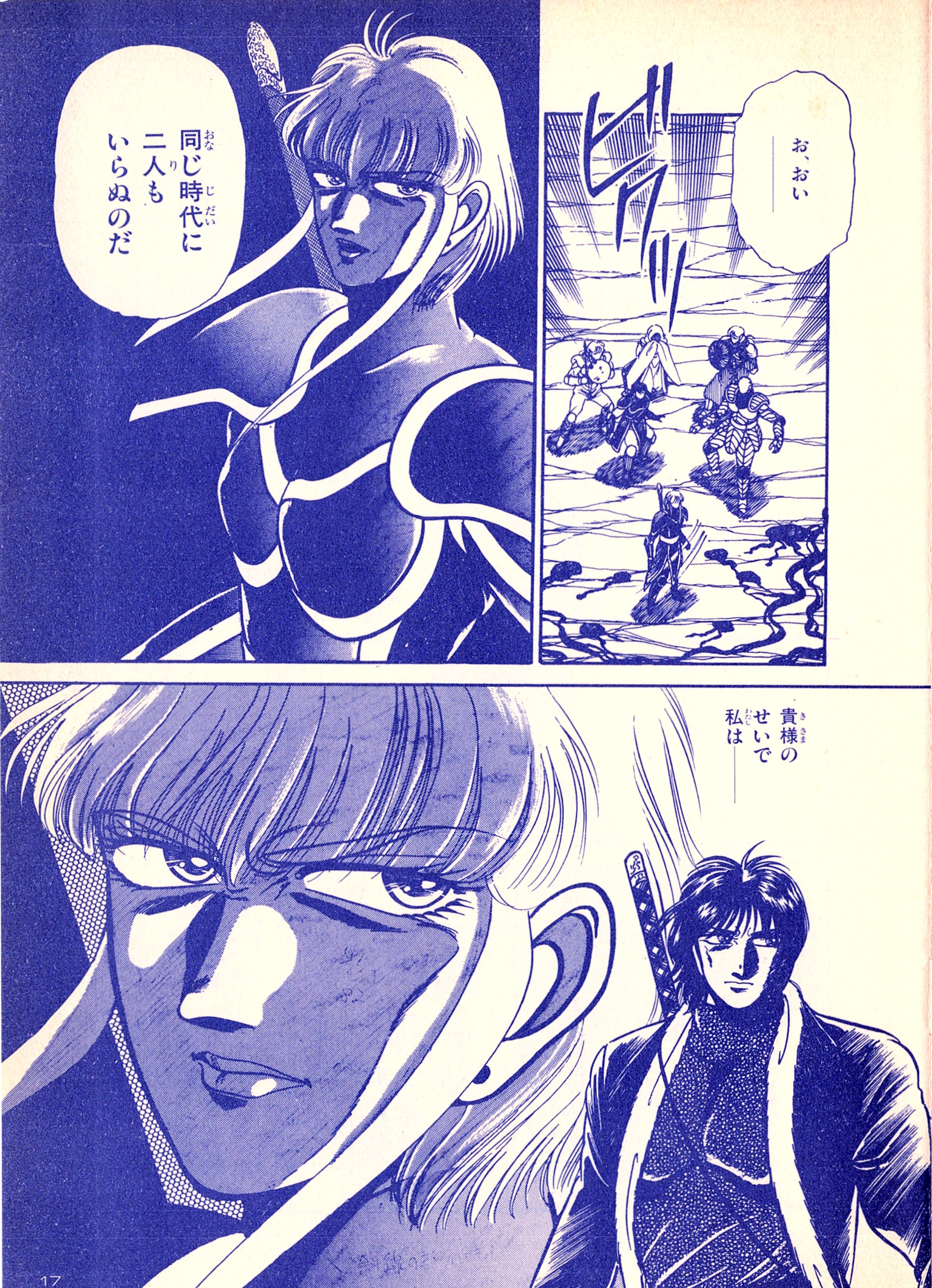

おい
リィナ
あ――
ごめん
寂しそうに
見えた
けど――
気のせい
だよ――
ね………


ケイヒ
任せておけ


ゴゴゴ

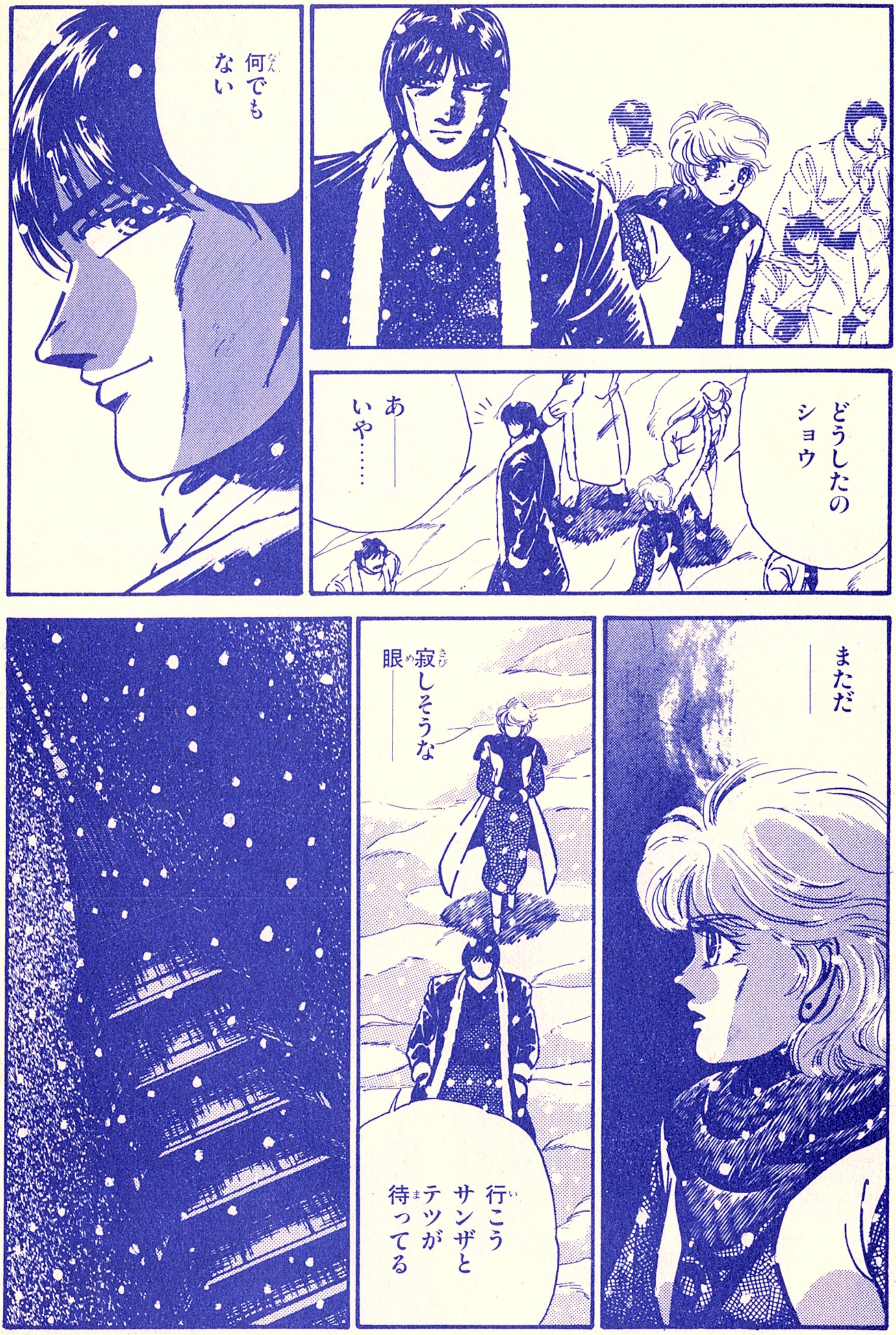

凰龍烈風斬
ほうりゅうれっぷうざん


さすが 凰龍の剣の 使い手よ
呪文いらず とはよく 云ったものよ
しかし
おぬしと 同等の力を 持つ者が もう一人 いるとはな


お、おい――
同じ時代に二人もいらぬのだ
貴様のせいで私は――


私は——
えーっ!
ショウって私より一つしか上じゃないのォ
そうだどうかしたか?
う、うん何か——テツより大人だから……
テツと同い年なのに……
150年以上前の人間だと云っても
ホント大人だな——
誰も信じ——


この気配の感触――
あの老人!
間違いない
二・三日前から
気にはなって
いたが――


どうしたの
ショウ
あ——
いや……
何でも
ない
まただ——
寂しそうな
眼——
行こう
サンザと
テツが
待ってる

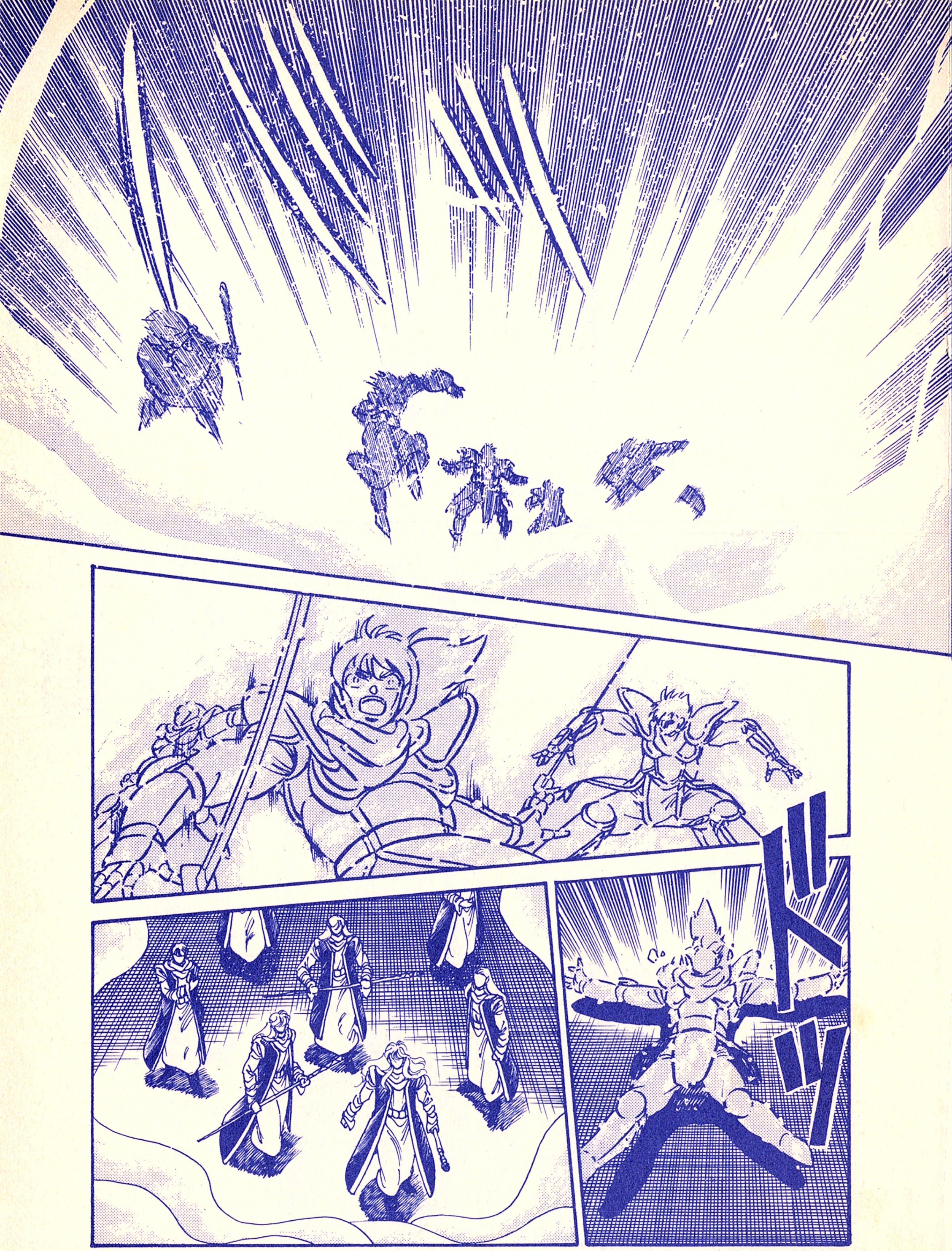

久しぶりだな――
152年ぶりだ――

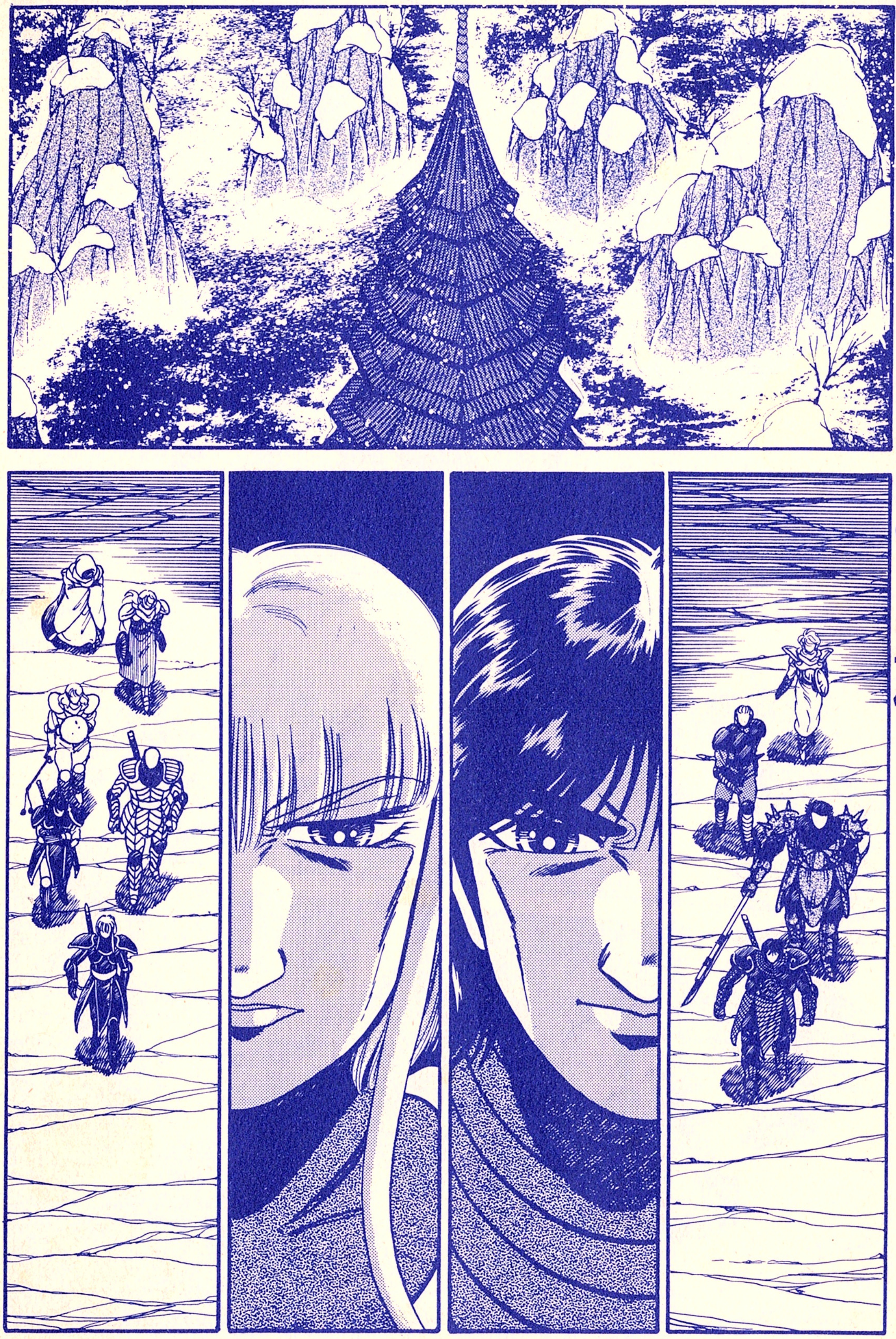

「クサナギ」自身が求めたのだ
「クサナギ」の封印を解いたと云うことは
乱が来るか それもかなりの強敵か
ホウ
なるほど――な
しかし「クサナギ」も迷っている
己を所有するに相応しい資質を持つ者が二人いるからか
そうだ



しかし選択するのは「クサナギ」自身——
我らの干渉も必要最低限に留めて——
第一層に入り込めた者達がいるらしいな
ん——
幸運と云うべきか
——不運と云うべきか
凰龍の塔の中か——
おそらく
おやっ
他にも入り込んだパーティがいるのかな
そうかもな


敵だ！
呪文を封じろ！
ち、違う
呪文を


ドッ



鳳凰の塔で待ちうけるものとは一体!?

次号(Vol.9 4月20日発売)につづく!! TO BE CONTINUED

Wizardry®

石垣環・作
定　価900円〔税込〕
絶賛発売中

ウィザードリィ外伝第1部

ギルの迷宮



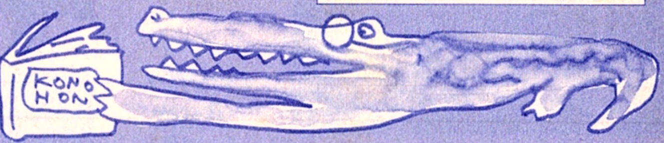
一気に読めば10倍面白い。

ホウライ国の若き侍・ショウとリルガミシンの
姫将軍ルー・シィディティの宿命の戦いが始まろうとした瞬間。
2人の身体は奇妙な迷宮へと転移させられる。
彼らは、邪法を用いこの世界の平衡を乱そうと企てる
魔導士ギルを斃すために、ここへ召喚されたという。
ギルとの闘いがいよいよ始まる！乞うご期待!!
（巻末特集／ウィザードリィ友の会ベスト編）

TVゲーム世代のためのスーパーブックガイド

by柴尾豊太郎

この本を読め!!



第四回『暗黒太陽の浮気娘』

シャリーン・マクラム著　ハヤカワ文庫ミステリアス・プレス

世界は一家、アメリカの「おたく」情報読本

普通だったら、2月、3月なんて、暇でしょうがないくらいの月なんだけど、なぜか、今年の2月は忙しい。別にドラクエにはまっていたわけじゃなく、今まで遊んでいたつけが返ってきたわけでもなく…。とにかく忙しさの原因はわかっているけど、あまりにも個人的なネタなので、あえて、ここでは書かない！

おまけにそんな忙しいさなかに、「薔薇の名前」なんて本が出ちまったもんだから、思いっ切りはまってしまって、他の本が読めなくなってしまった。何しろ、この「薔薇の名前」、5年以上前から、でるでると、噂だけが流れているうちに、ショーン・コネリー主演の映画まで公開されて、さらにその映画公開から2年が経過し、みんな出版されることを半ばあきらめていた頃についにでたという問題作なので、何を置いても読まなければならないのだ。

まあ、おもしろく読める本なんだけど、なにぶん読みこなすのに神経がいるため、かなりくたびれることも確かなのだ。ほら、スキーってそんなにしゃかりきにやっていなくても、宿に帰りつくとどっと疲れがでてくるでしょ。ちょうどあんな感じで楽しく読んでも、思ったよりページが進まないような本なのだ。

というわけで、「薔薇の名前」は次回あたりに紹介することにして、今回は去年の7月にでた本を紹介しよう。露骨な「お茶を濁す」ってやつだね。

もはや、あの人は今って感じになってしまったけど、Mくんの事件があったね。あの当時、「おたくの犯罪」って騒がれて、広く世の中におたくということばを広めた、あの事件だ。あの事件とほぼときを同じくして、アメリカのおたくたちを主人公にした小説ができたんだ。

その名も「暗黒太陽の浮気娘」。立派な推理小説なのだ。だけど、ミステリー以外はまったく読まないし、知らないような純粋培養のミステリーファンだったら、この本のおもしろさはまったくわからないと思えちゃうほどの怪作なのだ。

ストーリーをかいつまんで、紹介しよう。舞台はＳＦ大会。〈ルビコン〉というＳＦ大会で、ゲストとして呼ばれている人気ファンタジー作家が殺されてしまった。その犯人を洗い出すため、新進作家、オメガが立ち上がった。

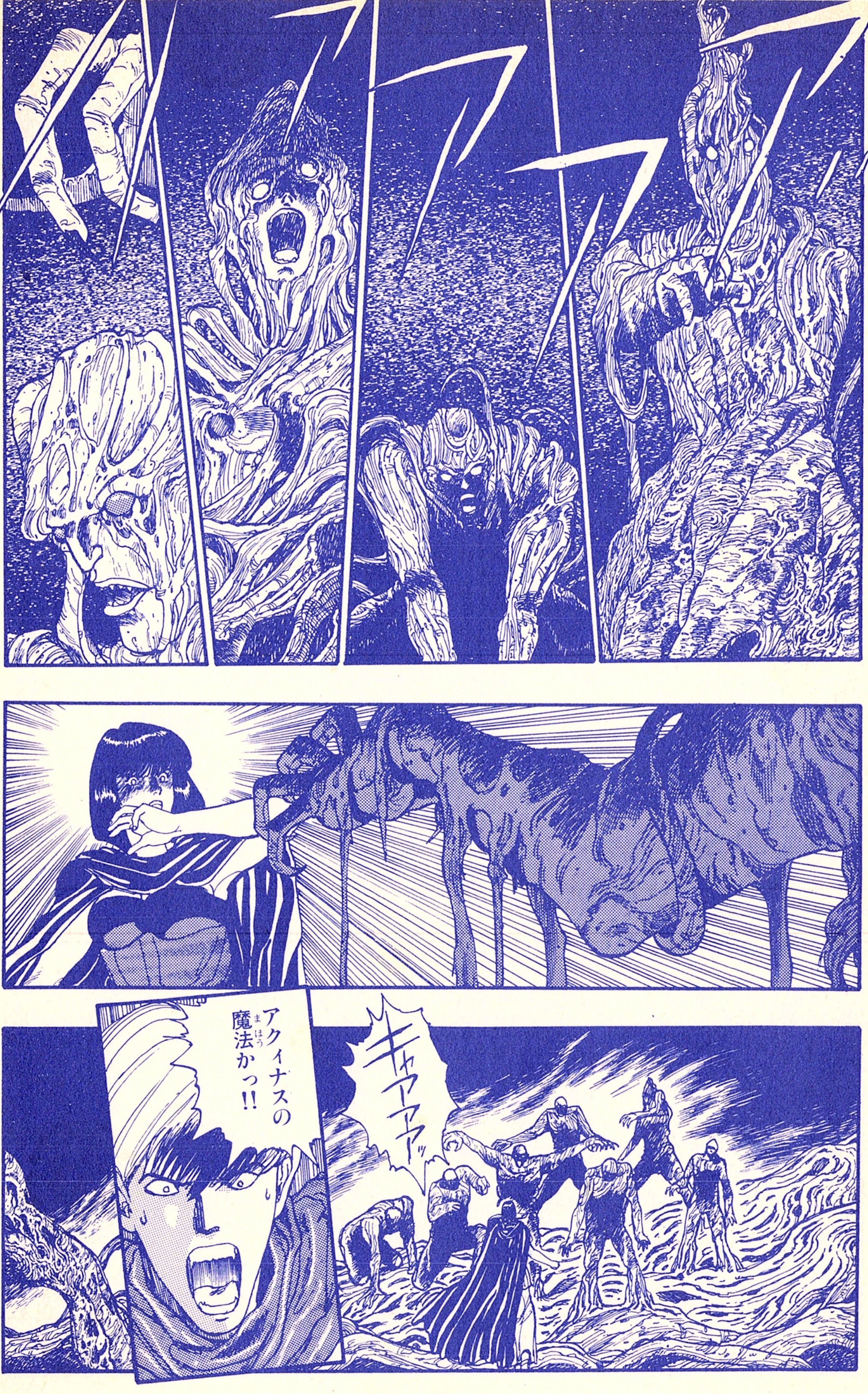
ちょうどコミケの雰囲気といったらいいのかな。スター・トレック、指輪物語などのコスプレをやっている連中がホテルを占領して闊歩するなか、あちらではＲＰＧをやっていたり、こちらでは即売会をやっていたりと…。ストーリーなんかより、ディテールを楽しんでいれば抱腹絶倒まちがいなし。あーアメリカにもこんなに立派な（？）おたくのかたがたがいらっしゃったんだな。おたくの魂は万国共通なんだと感心してしまう。

さらに、オメガが真犯人を追い詰めるのに使う手が、なんとテーブルトークタイプの元祖ＲＰＧ。もしも、そういったＲＰＧが実際どんな風に遊ばれているかを知りたかったら、へたな本を買うよりもこの小説を楽しんだほうが、よっぽどわかりやすいぞ。少なくともＲＰＧのふるさとアメリカでの楽しみぶりがよくわかっちゃうよ。



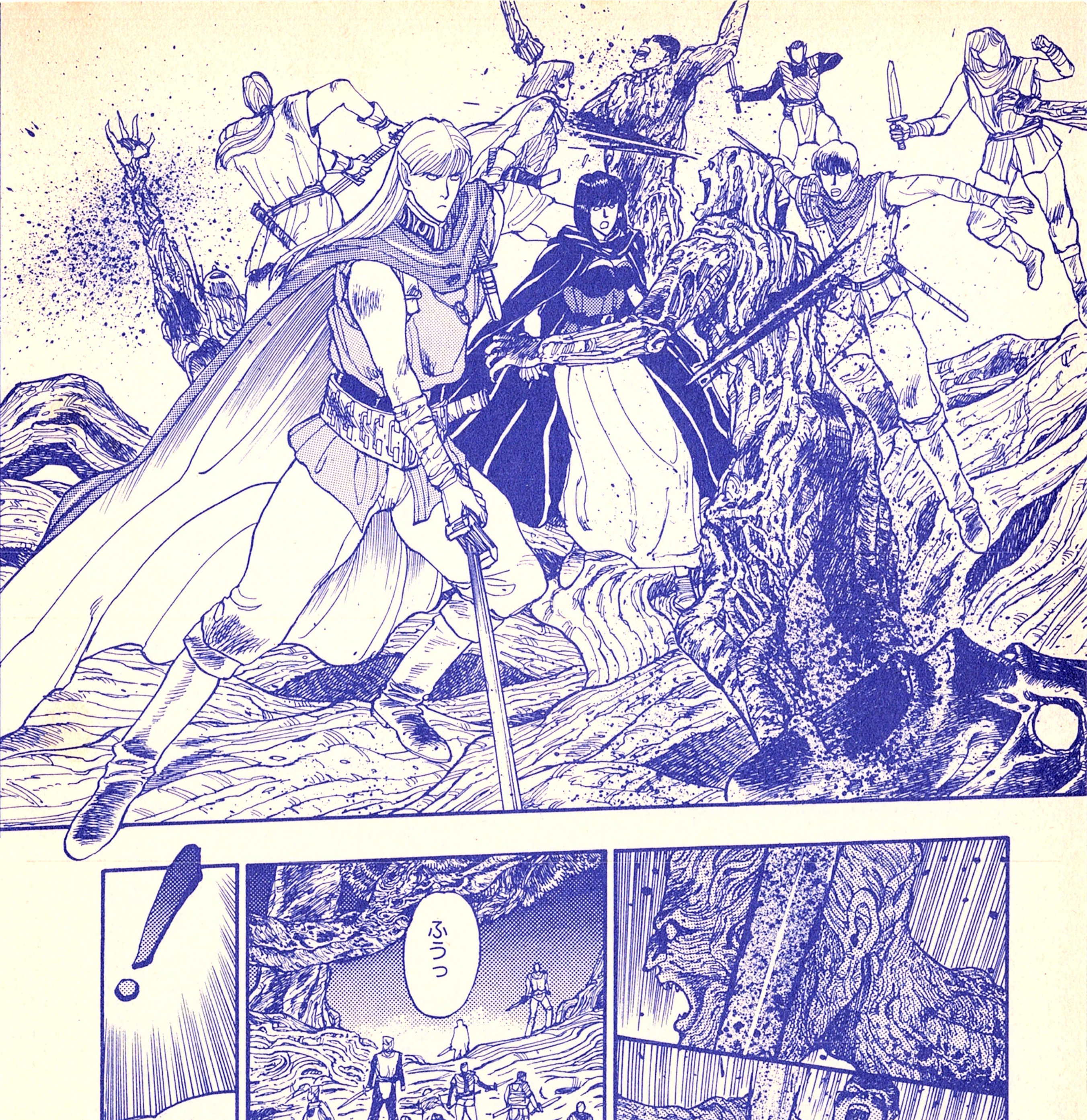
➡『暗黒太陽の浮気娘』シャーリン・マクラム著、浅羽英子訳、ハヤカワ文庫ミステリアス・プレス（440円）。登場するのは、アメリカのSFやファンタジー、RPGおたくの皆様。ところ変われど、人同じの感が強く残る怪作。RPGについてうんちくをかたむけたければ、この本を読め。


DRAGON LORE
最後の竜に捧げる歌II
SCENE④
アクィナス
兄、アクィナスと再会したグレイ
彼が明かした!〝大喰らい〟の意外な正体とは!?
by 外薗昌也
原作 手塚一郎

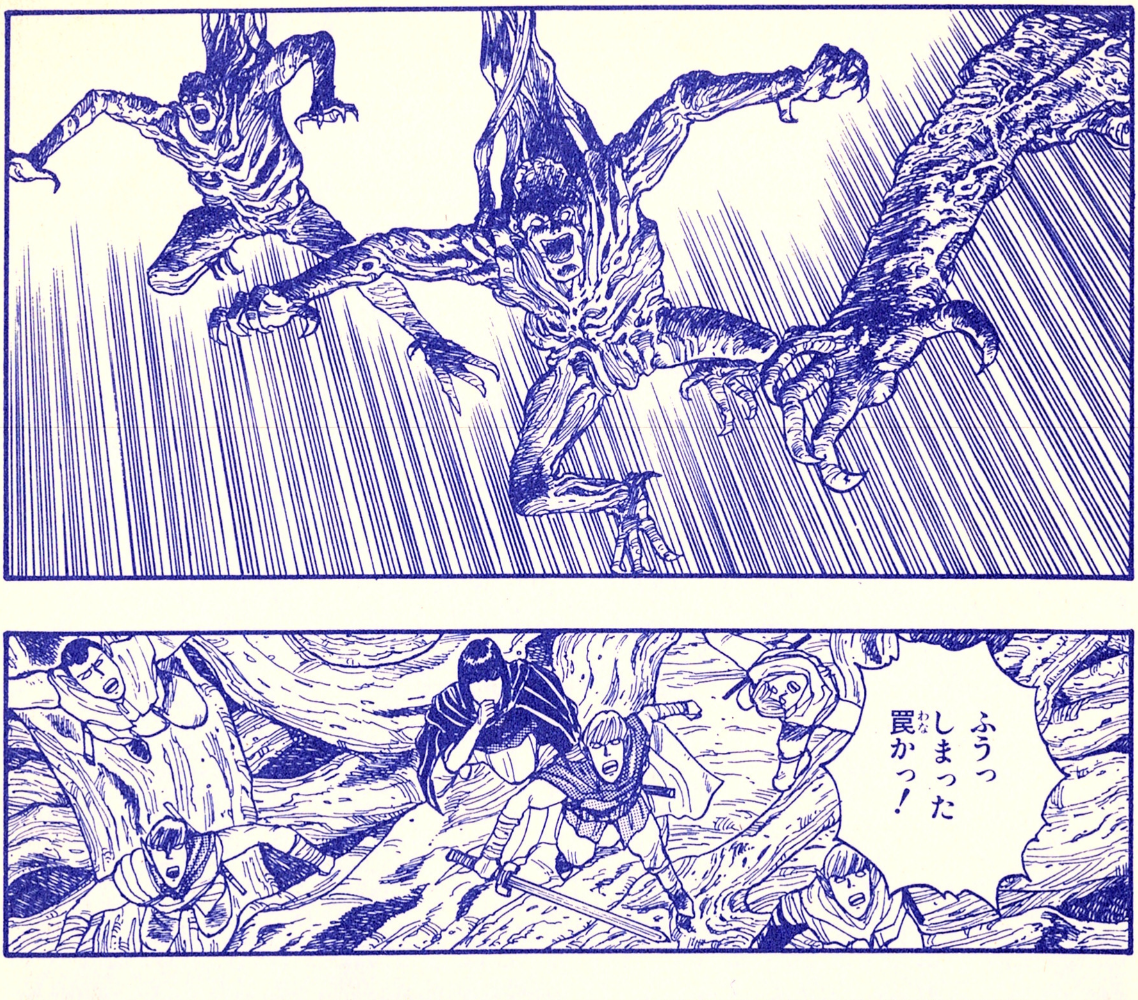


アクィナスにグレイが慕う兄の姿はなかった。何が彼を変えたのか!?

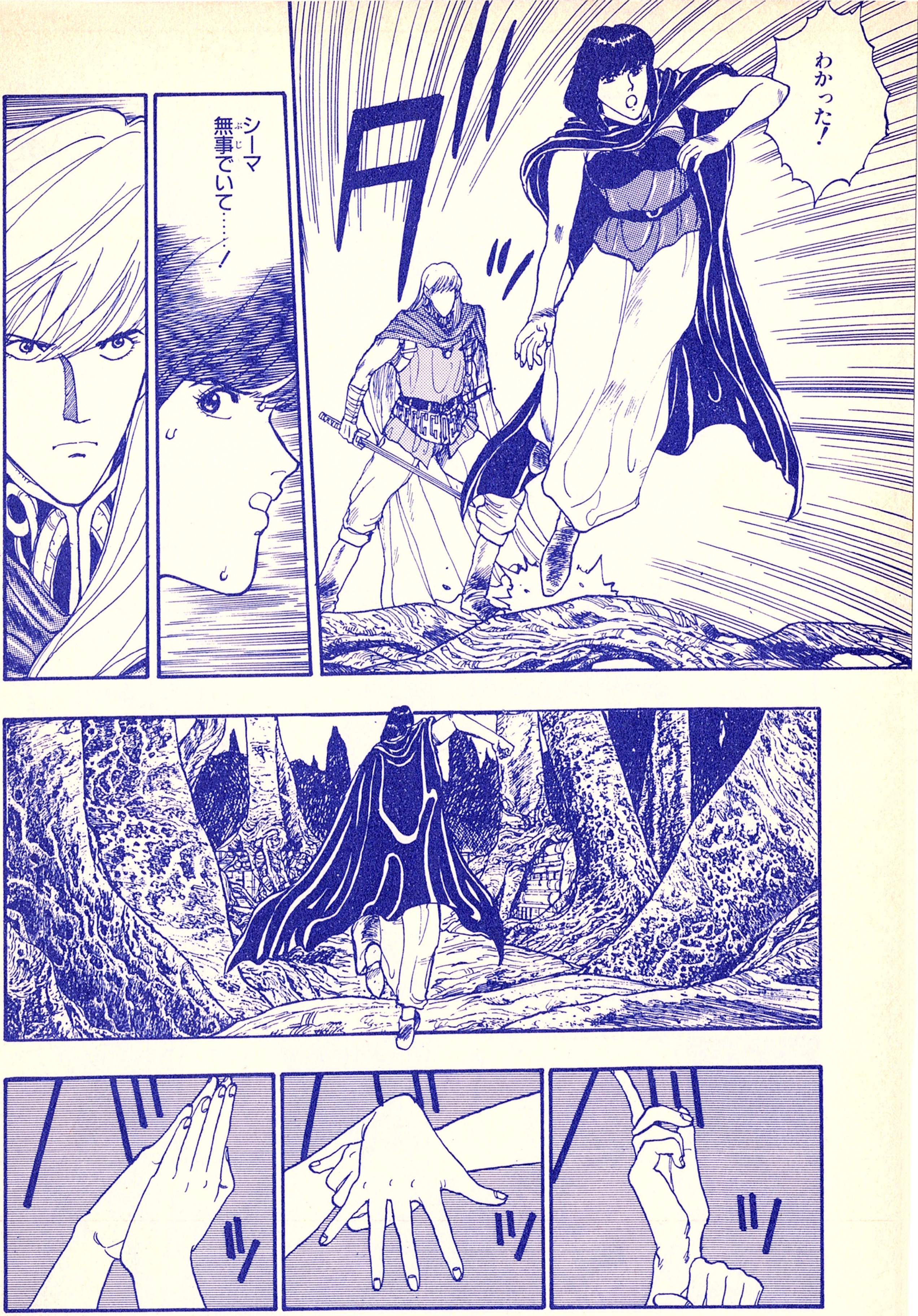

あっ
ダッ
シーマ!!
ちいっ
シーマに続けえっ!!
おおっ

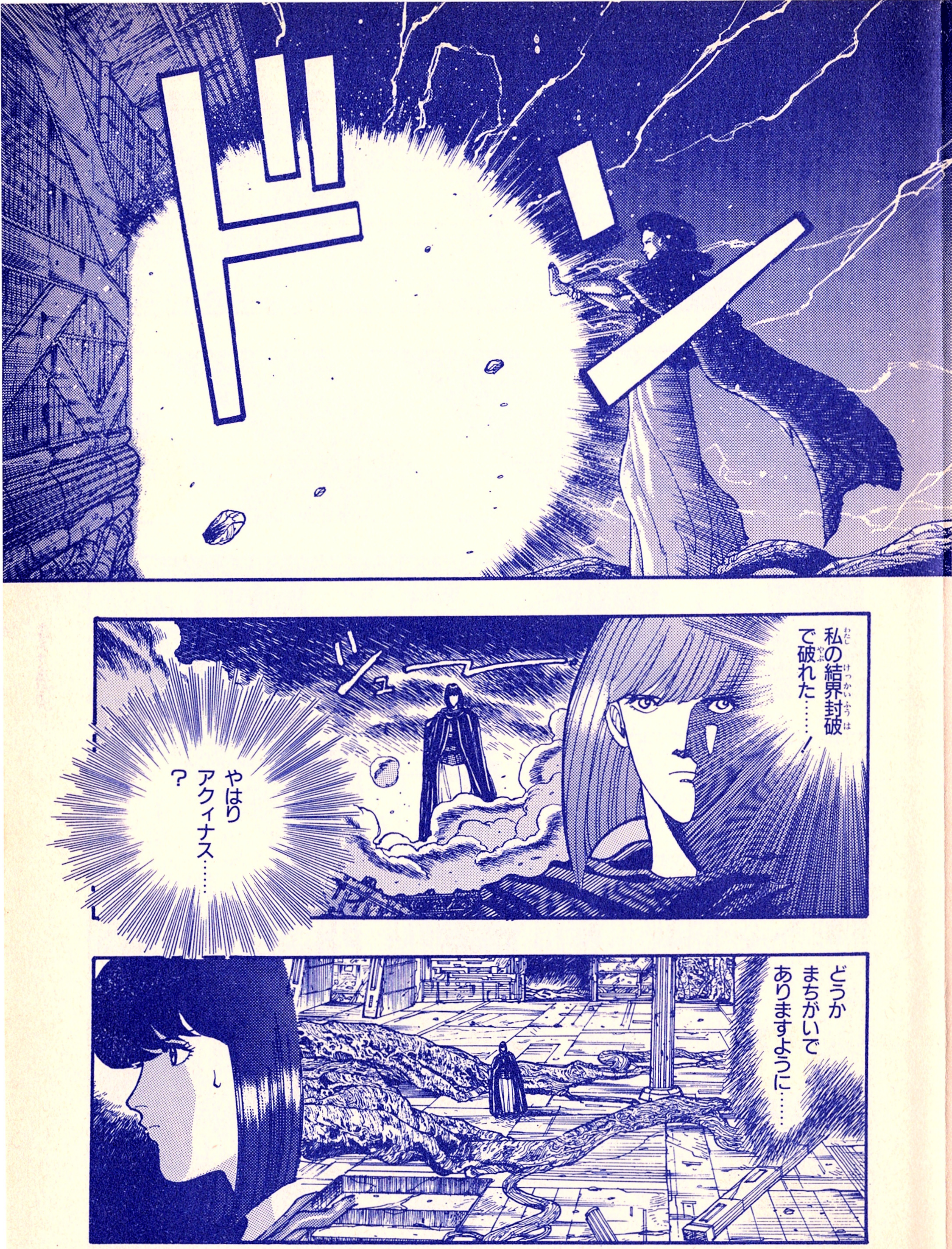

ふうっ
!

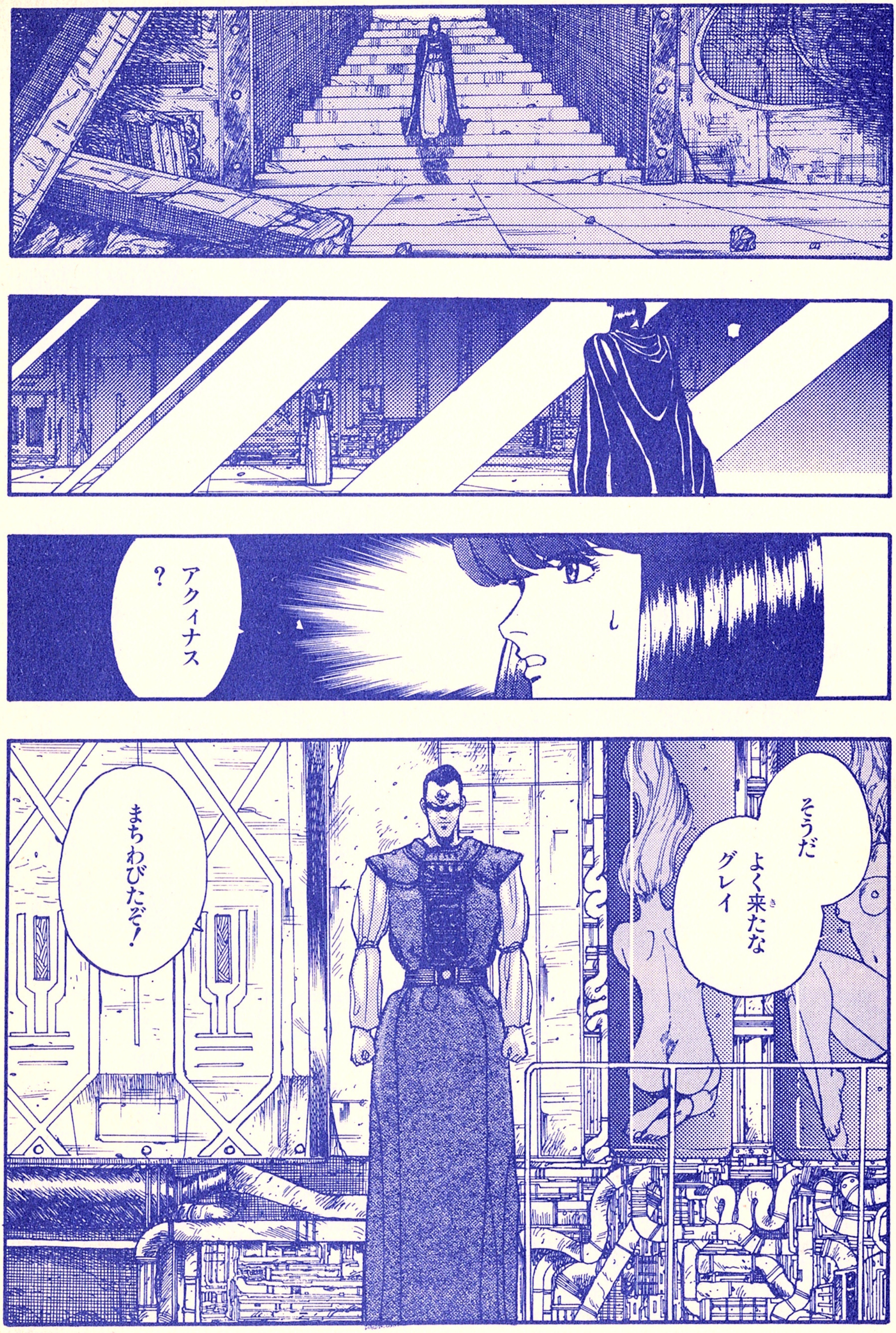


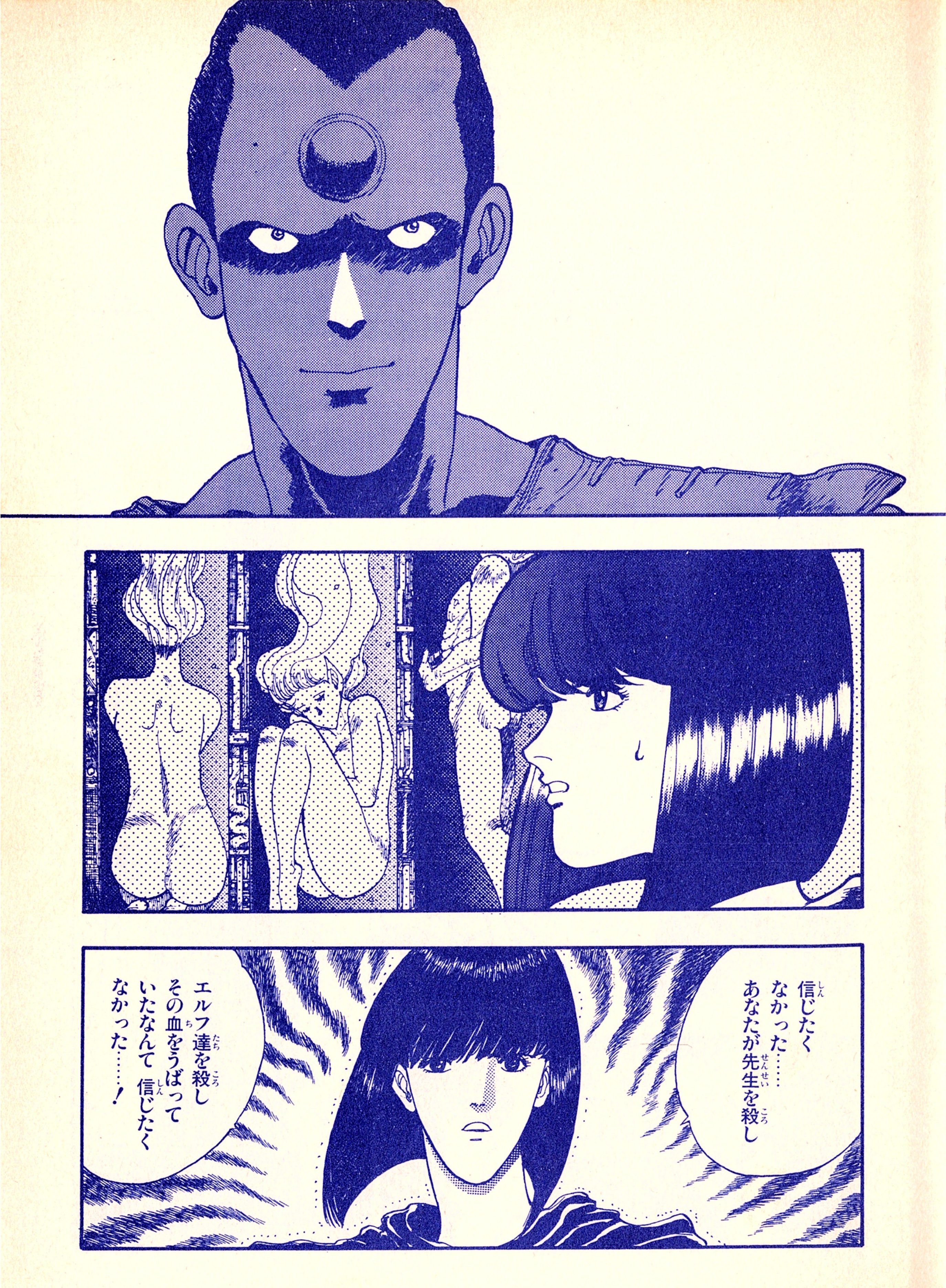

ふうっ
しまった
罠かっ！
うわあいっ！

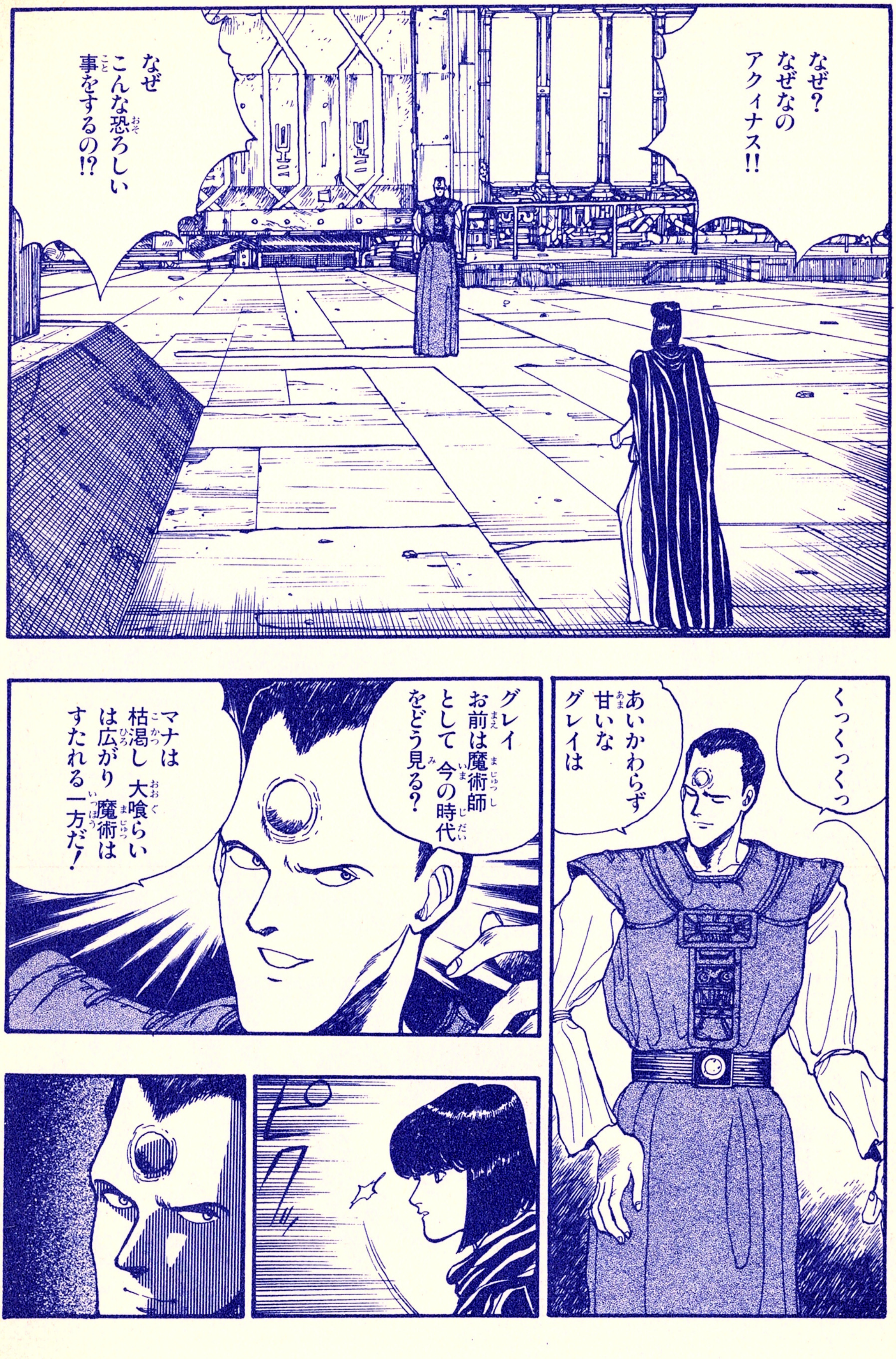

うわあああっ
サフィー!
アクィナスの仲間を、この手でつかまえてやがったのか!!
ここは我々がなんとかする!
あなたはフレシアの館に行ってください
でもシーマ!
行くんだ!!


わかった！
タッ
シーマ
無事でいて……！


ドン
私の結界封破で破れた……！
やはりアクィナス……？
どうかまちがいでありますように……


アクィナス？
そうだ
よく来たな
グレイ
まちわびたぞ！


信じたく なかった…… あなたが先生を殺し
エルフ達を殺し その血をうばって いたなんて 信じたく なかった……！


なぜ?
なぜなの
アクィナス!!
なぜ
こんな恐ろしい
事をするの!?
くっくっくっ
あいかわらず
甘いな
グレイは
グレイ
お前は魔術師
として 今の時代
をどう見る?
マナは
枯渇し 大喰らい
は広がり 魔術は
すたれる一方だ!



お前は 大喰らいを止める術をさがし ここまで来たんだろう？
教えてやろうか 大喰らいを止める方法を…… 同じ兄妹弟子のよしみで……
そもそも大喰らいは その昔 アルゴン・ゴルドン・ロト・チグレヌの 4つの都に住まう 4人の大魔導師が
4匹の巨竜を捕え その魔力を使い 地上に楽園を築こうと試み 失敗した結果できたもの と いわれて きたがな
ちがうんだよ 魔術は成功したんだ！
ただ問題は 4人の魔導師共にあったんだ!!


魔術の成功で無尽蔵に あふれでてきたマナは 生身の人間では制ぎょできなかったんだ！
自らよびこんだマナに魔導師共は逆に圧し 押しつぶされたんだよ！
つぶされる寸前に魔導師共はこう叫んだ「マナよ消えろ！」と
その瞬間にできたのが大喰らいさ
マナを喰らい砂と変える化物の完成だ！


もし大喰らいが無かったらとっくに この世界はマナに押しつぶされていただろう……
皮肉な話だなこの世界を脅かしている大喰らいが 実はこの世界を救っていたとは……
じゃマナが無くなれば大喰らいは――？
ああ止まるよのみこみが早いな……
だがマナが無くなるという事は この世界から魔法が無くなるって事だ……そうなれば 魔術師は用無しだ
無用の長物ってわけだ
そして 又大昔に逆もどりさ自然の脅威におびえ 獣や魔術にえじきにされひっそりと生きていかねばならん……

大喰らいを止める方法があった!!

しかしこの〝神になる秘法〟とは——?!!

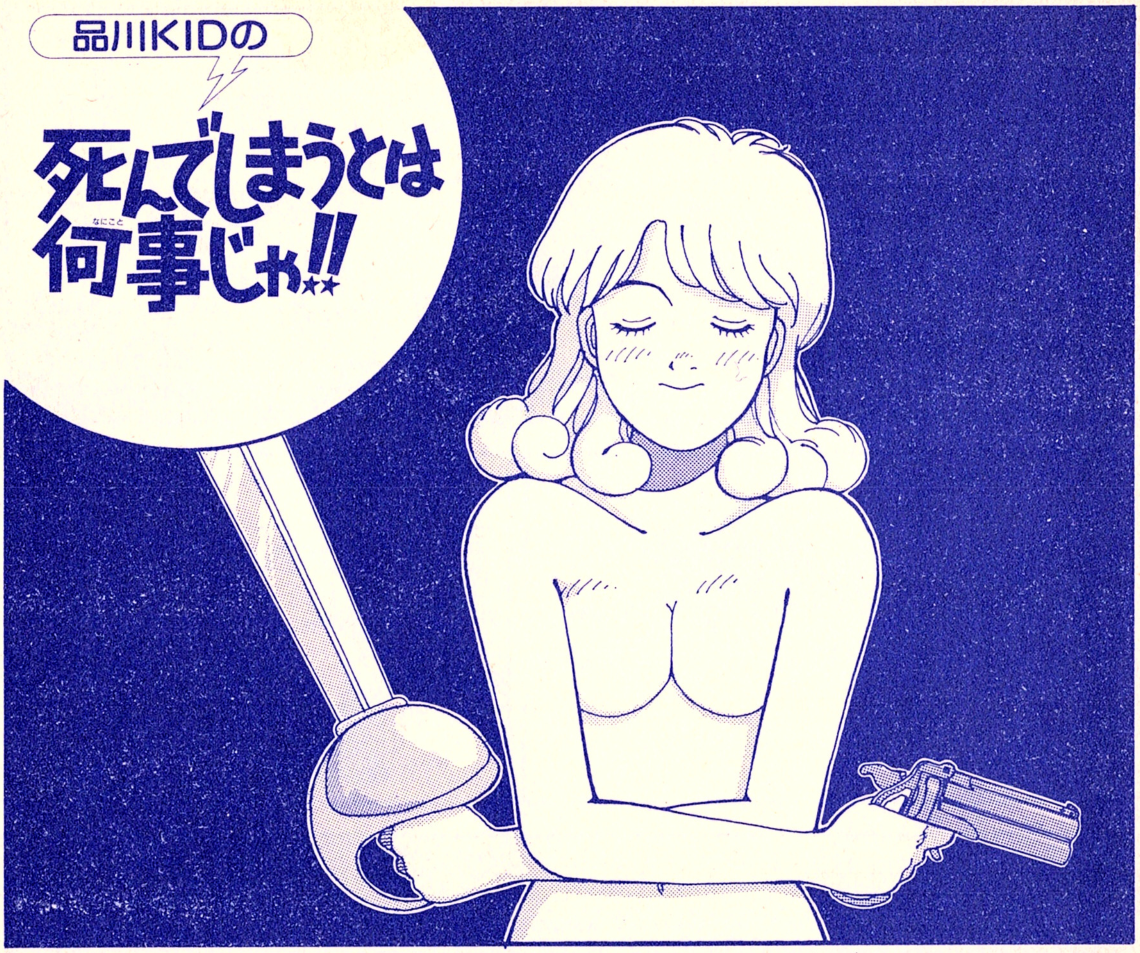


次号(Vol.9 4月20日発売)につづく!!

アホ光線がさらにパワーアップ!! 究極のRPGギャグ

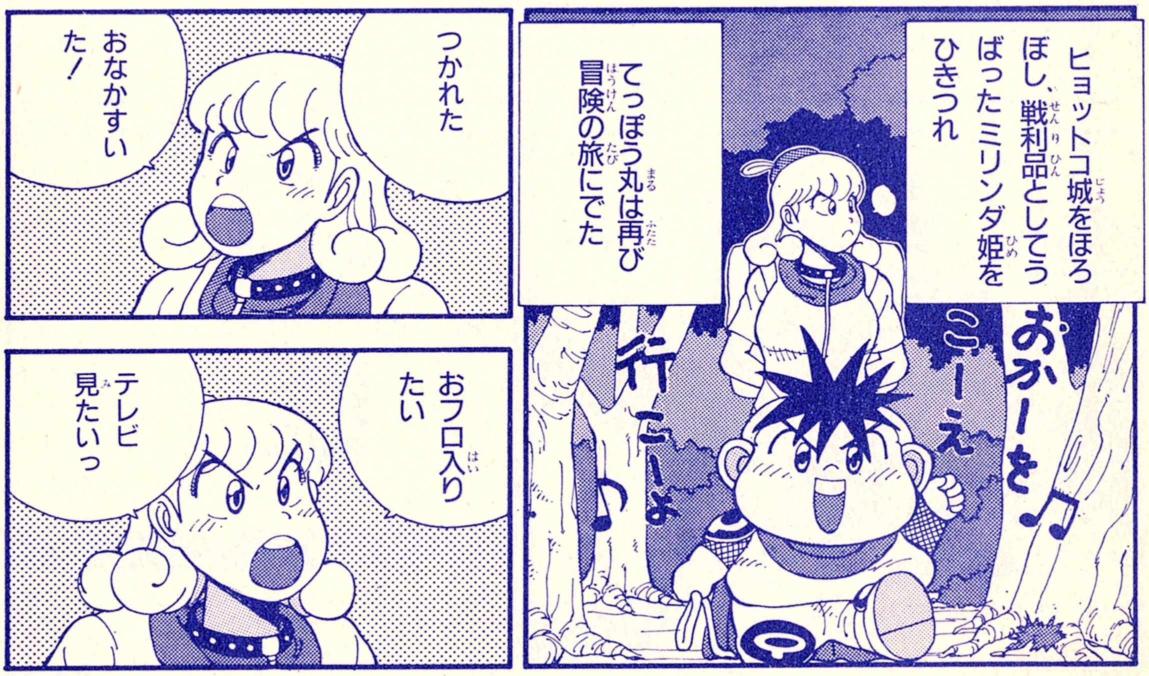
品川KIDの

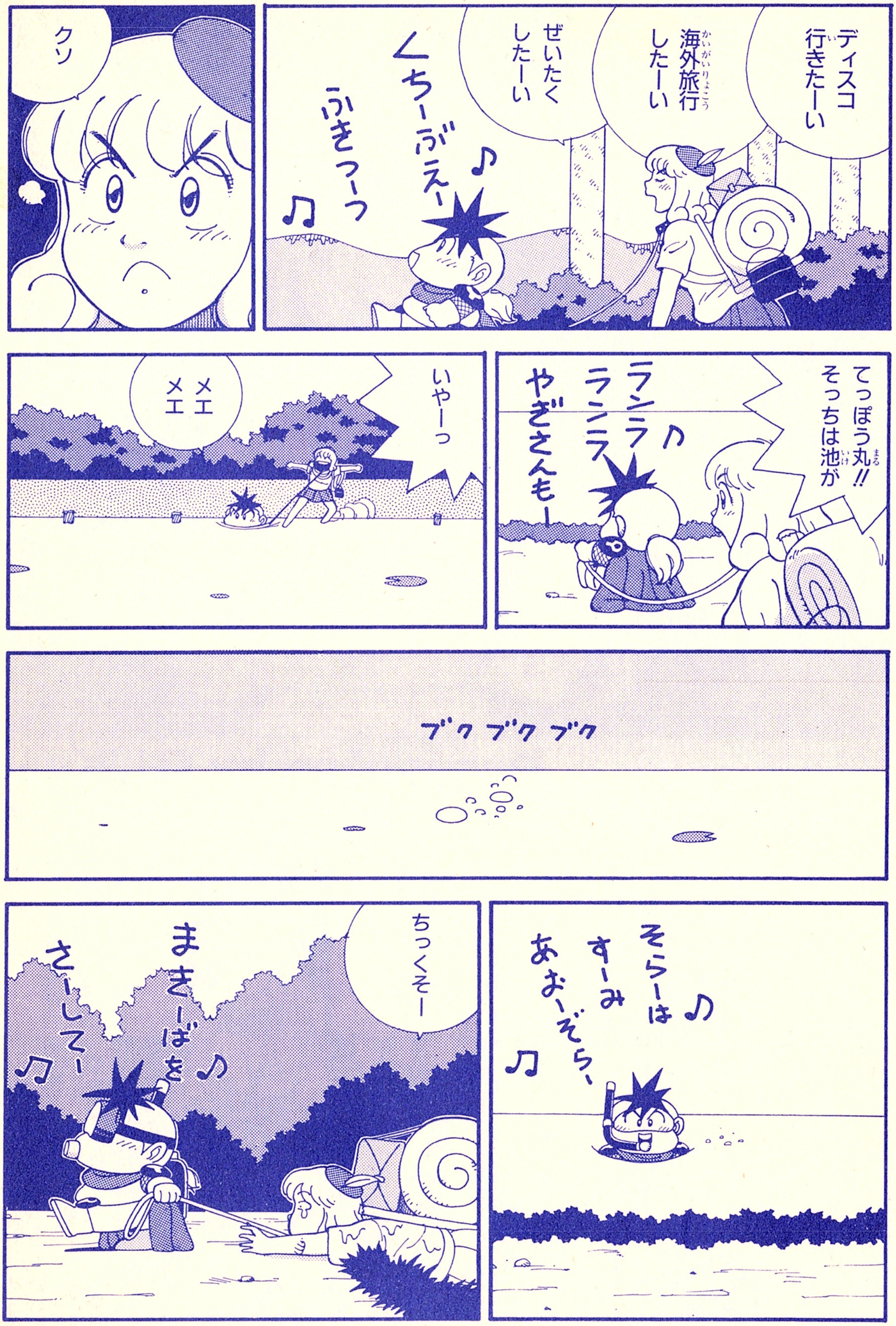
死んでしまうとは何事じゃ!!



第4回

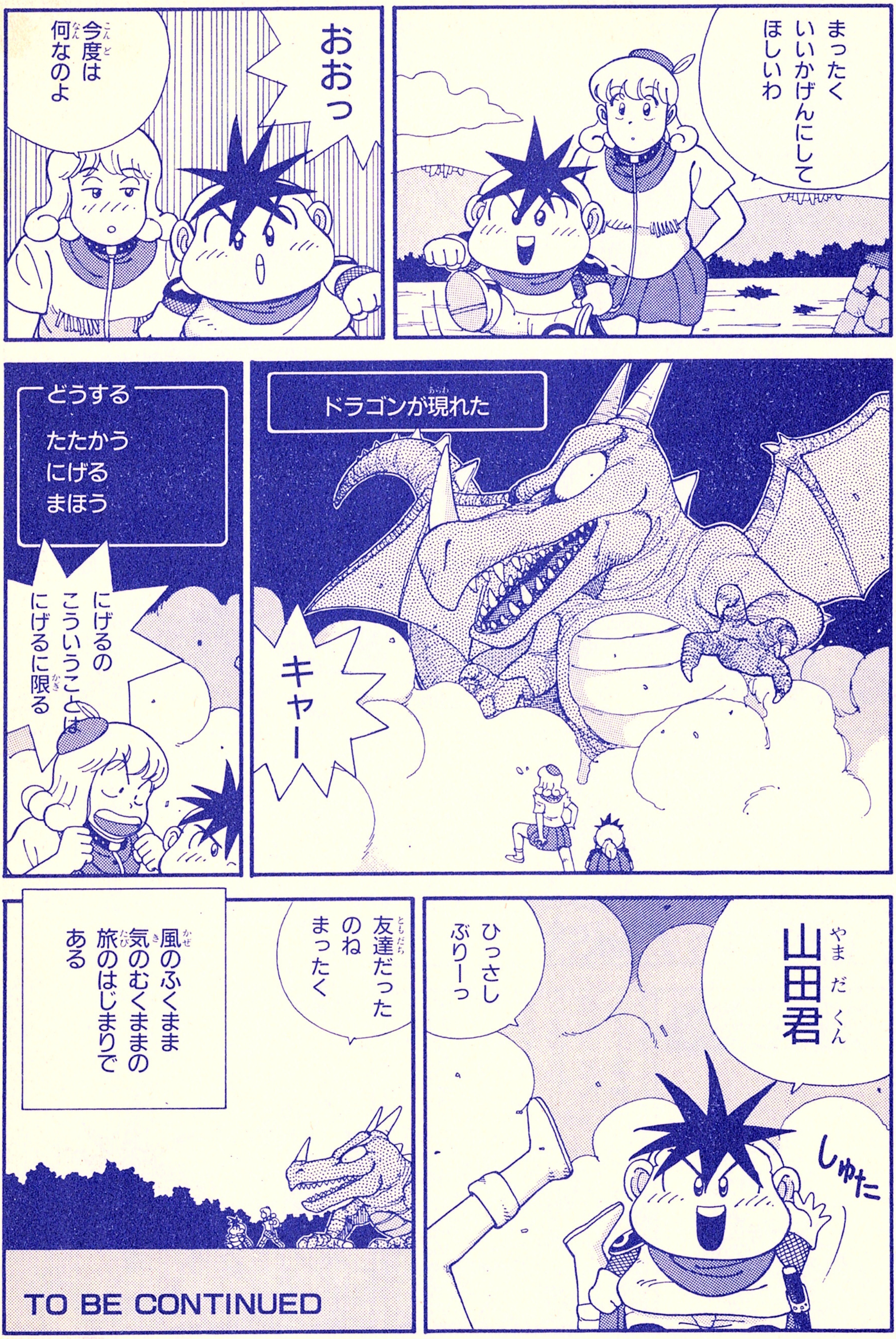
Presented by 品川KID




ディスコ行きたーい
海外旅行したーい
ぜいたくしたーい
くちーぶえー ふきつーつ
クソ
てっぽう丸!! そっちは池が
ランララ ランララ やぎさんもー
いやーっ
メエ メエ
ブクブクブク
そらーは すーみ あおーぞらー
ちっくそー
まきーばを さーしてー



ムッ
スライムが現れた
どうする?
たたかう
にげる
まほう
こんにちは
てっぽう丸はあいさつした
あいさつしてどーすんのよ
正義の味方はどっ動物を大切にしなくちゃいけないんだ
じゃあこの首わとりなさいよ人間だって動物のうちよ
こーの動物め動物め
キャアっ
ふん ふんでやる
どさくさにまぎれて何やってんのよーあんた
スライムはにげた
ザザザザ



次号、新展開に乞御期待!!はい。

Wizardry・II

小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか

第13回

炎上する宿を前に繰り広げられる死闘。
妖獣を追い詰めるジヴラシアに
恐るべき石化の罠が待ち受ける。
絶体絶命の窮地から脱出する術はあるのか。
そして、謎の男の出現は何を暗示するのか――。



作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第十三章〕石化

冒険者の宿は、完全に炎に包まれていた。

並の炎ではない。

爆炎の呪文で呼び起こされた超高熱火炎が大量に貯蔵されていた燃料油に引火し、爆発的に館の両翼まで燃え広がったのだ。

ロイヤルスイートのある左翼の二階からも激しい炎が噴き上げている。この火勢ではあの妖獣と言えど、増殖中のものは残らず消し炭になったことだろう。

わずか数秒で、建物は原形を失いつつあった。とてつもない熱量が、容赦なく全てを破壊していく。

だが、俺はまだ緊張を解いてはいなかった。

エレインと同化した奴が、まだ炎上する館の中で生きている。そう確信があった。

館の中央部が崩れた。盛大に火の粉が上り、薄曇りの空に朱の色を撒き散らす。

建材が砕け、爆ぜる音が盛大に鳴り響く。その中に混ざった微かな異音を俺の耳は聴き逃さなかった。

床の上を、重く弾力を持った物体が高速で移動する摩擦音だ。

あいつが、焼ける館内を疾っていた。

突如、右翼の二階の壁が砕け散った。そして内側から、凄まじい勢いで影が虚空に飛び出す。

「逃がさない！」

絶叫とともに、妖獣の巨体が宙に舞っていた。

ピンク色だった表皮は炎に焙られ、ぐずぐずに白く焼けただれている。二本の触手と口管はほとんど炭化し、エレインのマスクは溶け崩れたように原形を失っていた。ただ緑の眼球だけが、その眼窩から地上の俺を睨みつけている。

全身から蒸発する体液が煙のように空中に尾を引く。

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山〝スケイル〟に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍ル'ケブレスの護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。そしてついに、主人公ジヴラシアのグループであるガッシュ、マイノスらの善のパーティが最上層の探索に出発したのだった。

しかし翌朝、一行は消息を絶った。捜索隊が急ぎ組織され、ハイランスの指揮する三隊の善のパーティが迷宮へと向かう。一方身動きの取れぬジヴラシアとディー、ザザは王宮に召喚され、王国の統治者ベイキ女王との謁見を行っていた。そこに善のパーティのひとりアルタリウスが現れるが、それはすでにアルタリウスではありえぬ奇怪な生物と化していたのであった。分裂、増殖を繰り返す妖獣に苦戦しながらも、重傷を負い生還したマイノスの援護で辛くも女王を救う三人。もうひとりの妖獣エレインが冒険者の宿に向かったのを知り、ジヴラシアとディーはすぐさま転移の呪文で跳ぶ。しかし時すでに遅く、残留組の悪の冒険者は全員妖獣の餌食となっていた。分裂した妖獣たちを宿ごと焼き払おうと試みる二人だったが――。

主な登場人物

- ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
- ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
- ザザ……レベル13の僧侶。悪・人間族。
- ディー……レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
- マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
- フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
- ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
- アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
- エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
- ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
- ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
- ル'ケブレス……迷宮を支配する龍。〝平衡〟の守護者。

大きな孤を描いて、妖獣は俺から約十メートル離れた地点に叩きつけられた。ずしり、と重い地響きが伝わってくる。
落下のダメージなどないかのように、妖獣は即座に身を起こした。そして間髪を入れずに、俺に突進を開始しようとする。
だが、その一瞬に俺は間合いに踏み込んでいた。
勢いのついた右の蹴りが、妖獣の腹にめり込んだ。
廻した蹴りではなく、突き出した蹴りだ。軸足が大地を踏み締める力が、そのまま蹴りのエネルギーとなって相手を打つ。
柔らかい肉腫の感触と、確かな手応えがあった。防具なしの人間なら肋骨がへし折れ、内臓が破裂している一撃だ。
大量に水分を失いながらもまだ百キロ以上の重量を持つ妖獣が、宙に浮いて五メートルほど吹っ飛んだ。
「誰を逃がさねえんだ」
俺は仰向けに倒れてもがいている妖獣に語りかけた。「てめえ、俺が尻尾巻いて逃げたと思ってたのか？　逃げられないのはてめえのほうだぜ」
「おのれ——」
呪咀の呟きを漏らして起き上がる妖獣を、俺はもう一度蹴り飛ばした。
「どうした、動きが鈍いぜ。躰を再生する暇がねえか？　触手がそれじゃあ、俺を捕まえられやしねえよ」
転がった妖獣が、ぎちっ、と吼える。が、その叫びはもはや弱々しかった。
「エレインのふりもやめたかい。そのほうがいいぜ」
俺は口元を覆っていた布を外し、右の拳に固く巻きつけた。「くたばる時ぐらいは、もとの化物として死ね」
きぃ、と哭いて妖獣は、倒れたまま身をくねらせて俺から遠ざかろうとする。だが、二度の蹴りが怪物の運動機能を極端に低下させていた。
俺はゆっくりと妖獣の前に回り込んだ。
炎の放つ朱の光に照らされ、妖獣は緩慢な蠕動運動を繰り返していた。七体もの幼生をベインらに植えつけたせいもあってか、もはやこの化物に分裂増殖するだけの力は残されていないようだった。
アルタリウスや衛士隊の隊長の殺られ様を見た限りでは、妖獣の同化は他生物の口腔などから体内に侵入して行われるらしい。こいつの弱りきった巨体では、それは不可能だ。
危険はほとんどない。あとはとどめを刺すだけだ。
俺は腰をわずかに落とし、右拳を頭の高さに掲げて身構えた。
拳に巻いてある布は、目を細かく織りあげた特殊な代物だ。マスクにすれば煙をある程度吸い込まずに済むし、いざという時には水を濾過して飲料水を造ることもできる。古来より伝わる忍者の携帯品で、万一この化物が皮膚から同化する能力があるとしても、打撃を与える瞬間は拳の接触を防いでくれる。
妖獣が俺の動きに気づき、躰の向きを変えようとした。崩れたエレインの顔が、こちらに無防備に晒される。
その一瞬に、俺は全身の力を込めて拳を打ち下ろしていた。
突出した眼球の間の、人ならば烏兎と呼ばれる必殺の急所だ。王宮での闘いで、ここが妖獣の死点のひとつだと判っている。
拳が肉を叩き、衝撃が妖獣の内部を破壊する。
拳の下で、芋虫のような巨体がびくりと痙攣した。
急激な体内の圧力上昇で、緑の水晶のような眼球がさらに飛び出す。同時に眼窩から噴き出したぬめりのある体液が、俺の右腕に生温かく纏わりついた。
俺は拳を引いた。
館の両翼が倒壊し始めた。
わずかに強まる炎に溶けるかの如くに、妖獣の躰は潰れてだらりと地面に広がる。
今の一撃で、冒険者七人——エレインを含めれば八人——を餌食にしたこの忌まわしい化物は、完全に生命機能を停止していた。
俺は息をついた。
ベイン、ブライスらを救えなかったのは残念だが、下手をすればリルガミン中に増殖しかねない妖獣を全滅させたのだ。いかに善の連中から無感情な戦闘機械のように言われる俺でも、さすがに気が緩む場面だっ

た。
知らないうちに、俺はその場に片膝をついていた。
そんなに力を抜いた覚えはなかった。
おかしい。そう思い、すぐに立ち上がろうとしたが、四肢がつっぱったように身動きが取れない。
同じ感覚を味わった記憶が、その時ようやく蘇えってきた。
麻痺毒——迷宮をうろつく灰造人や多脚甲虫の爪、それに善の水晶を守護していた天使どもの剣に仕込まれていた、人体に入れば全身の神経の伝達を妨げ、運動筋肉を痺れさせる神経毒だ。一度受けると、僧侶呪文第三レベルの治痺で体内の毒素を分解してもらわない限り、自力では指一本動かせない木偶人形と化してしまう。
今の症状は、天使の手にした煌めく剣が躰を掠めた時に受けた、麻痺の感覚に極めて似ていた。
似ている、というのは、そっくり同じ訳ではなかったからだ。
全身が、硬直を始めていた。まるで岩塊の中に閉じ込められたような圧迫感がある。
内臓器官や呼吸器などの生命維持機能と、視覚、聴覚だけは辛うじて生きている。が、それ以外は石か何かに変質してしまったかのようだ。
噂に聞く、さらに重度の麻痺症状・石化だ。
俺たち悪のパーティはお目にかかったことはなかったが、善の連中が探索した迷宮第四層には、この石化をもたらす鶏に似た化物コカトリスが徘徊している。また、水晶の片割れ・悪の水晶を護っていた悪魔像デルフも、石化能力を操ると聞いている。
身動きが取れぬという点では麻痺と大差はないが、迷宮の探索中には石化のほうが数段恐ろしい。何故なら治痺では治療できず、治療回復呪文の切り札とも言うべき快癒を使わなければならなくなるからだ。
呪文所有者が呪文効果を引き起こす際には、特定の精神領域に極端な負担をかける。七段階に分けられた呪文のレベルはこの精神領域を表しており、魔法を使用する度にそのレベルに応じた領域は激しく疲弊していくのだ。そして術者の能力の上限を超えると精神集中は不可能となり、そのレベルの呪文は使えなくなってしまう。この上限までの回数が一般にマジックポイントと呼ばれる呪文の残数だ。
長時間の熟睡が取れればマジックポイントは回復するが、迷宮内では充分な休息は取りようがない。マスタークラスの僧侶でも快癒の属する第六レベルの呪文使用上限は四回程度で、これを石化の治療に食われるのは生き残る確率をすり減らすに等しかった。
右腕が、酷く痺れていた。
どうして俺の肉体が石化し始めたのかが、その痺れで見当がついた。
妖獣の体液だ。最後の一撃を放った際に右腕にかかった粘液が、皮膚から浸透する石化成分を含んでいたのだ。
触感は麻痺していたが、俺の全身を冷や汗が伝い落ちたような気がした。
もし今の攻撃で死点を外していたなら、石化して無防備になった俺はこの化物の餌になっていただろう。それを思うと息が詰まりそうだった。
炎を噴き上げ続ける館の左翼の残骸を見つめながら、俺はしばらく平静を取り戻せずにいた。身動きが取れぬため、視界はそちらに固定されているのだ。
恐怖が鎮まると、今度は笑いが込み上げてきた。もっとも今の俺は、笑いたくとも顔の筋一本ひくつかせることはできないが。
何とも、間の抜けた話じゃないか。自分の攻撃で石化され、硬直して屈み込んでいるこの姿をディーが見たら何と言うか。考えただけでもお笑いだ。
この状況で生命の危機に晒されていないのも、訳もなく可笑しく感じられた。唯一の危険は、俺の足下で薄汚い肉塊となってくたばっているのだ。そいつがなおのこと可笑しい。
緊張が解けたおかげで、一時的な躁状態にあるらしい。辛うじて閉じることのできる瞼をしばたかせ、俺は頭の中で意味もなく笑い続けていた。
細めた視界に、何かが動いた。
若干弱まってきた炎の手前、熱で干からびた下生えの上に影が躍って


Masaki

いるのが見える。
俺は笑うのをやめた。一瞬心臓も止まったかも知れない。
それは黒焦げになりながらも、業火の中から這い出そうとする妖獣の幼生の影だった。
あの炎の中で、生き延びた奴がいたのだ。
体長は二十センチほどで、大きさから見てベインに取り憑いていた奴らしかった。すぐさま体内に潜り込む例の手で、炎のダメージを抑えていたのだろう。
そいつは炎の熱が和らぐ場所まで這い出すと、そこで十秒ほど身を震わせていた。
力尽きたか、と期待したのも束の間、妖獣はまだ形の整わない躰を起こしてゆっくりと、しかし確実にこちらに向かって進み始めた。
俺を目指しているのが、はっきりと判る。が、石化した俺には反撃どころか逃げる術さえない。
どうやら避けようのない死への秒読みが始まったようだ。
あと、二十メートル弱。
じわじわと近づく妖獣は、差し詰め死が具象化した姿といったところだろうか。これなら一息に心臓を刺し貫かれるか、呪文で灼き殺されたほうがずっといい。
気の弱い者なら、恐ろしさのあまり発狂している状況だ。
しかし、先刻冷や汗を流しきったせいか、俺は自分でも不思議なほど冷静だった。
残り十五メートルになった。
望みがあるとすれば、その十五メートルを肉腫が進みきるより早く、ディーがここに戻ってくることだった。着火後裏庭からすぐにこちらに向かっていれば、時間的には間に合う筈だ。
だが、その気配はない。
妖獣が俺に取り憑くまで、あと十メートル。
衛士隊が到着するにはまだ間があり過ぎた。
奇跡なんてものがそうそう起こらないのは、この一年の闘いで良く判っている。生き死にってのは思っているよりあっさりしたものだ。
醒めた諦めと同時に、化物の増殖の苗床になったなら、せめて意識を喰われる前に呪文で焼き払って欲しいという思いが頭をもたげた。それにはディーも間に合うだろう。
ふと、奇妙な考えが浮かんできた。
あの妖獣が俺の記憶を喰ったなら、答が判るのだろうか。
肉体を鍛え抜いた意味が。
敢えて冒険者という危険な道を歩んだ意味が。
俺は、何を望んでいたのかが。
たとえはっきりしても今となっては意味がないことだと気づき、俺は頭の中で肩をすくめた。
それでも俺は、目を閉じなかった。
残りは五メートル。もう肉腫によった皺の一本一本までが見てとれる。
助かる見込みはない。
さらに距離を詰め、爛れた肉塊は躰をぐっと縮めた。そこから俺の顔に飛びつこうという肚なのだ。
出てきたばかりの小さな眼球で、妖獣が俺を見上げた。その眼に、抵抗できぬ獲物を前にした喜悦の表情が浮かぶ。
せめてもの抵抗に、俺は妖獣を睨み返した。これが最後に見る光景かと思うと胸糞悪かったが、考えて見れば誰でもくたばる時はこんなものなのだろう。
たわめた筋力を解放し、妖獣が跳ねた。視界一杯に、肉腫の腹に生えた無数の触脚が広がる。
それが俺の顔面に張り付く寸前、左方から緑色の光が視界を貫いた。
眩しさで俺は一瞬瞼を閉じた。
次に目を開けた時、そこには何もなかった。地面の上に妖獣の這ってきた粘液の跡があるだけだ。
空中で、妖獣は跡形もなく消し飛んでいた。
「リルガミンは聖都と聞いていたが、随分と面白い生き物が巣くっているな」

WIZARDRY Ⅱ

風よ。龍に届いているか

深みのあるバリトンが聴こえてきた。聞き覚えのない声だ。

妖獣を仕留め、俺を救ったあの緑色光は、この声の主が放ったものらしかった。が、もしあれが攻撃呪文なら、俺の知っているもののどれにも当てはまらない。

足音が近づいてくる。左方——街路に続く門のある方向からだ。身動きできない俺には死角になっている。

足音は俺の傍らで止まった。俺は自由になる眼球だけを動かして相手の姿を探ろうとしたが、まだ視界に入らない位置だ。

「ふん。石化か」

男は軽い嘲りを込めて言った。「死ぬところだったな」

視界に、黒く染めた手袋に包んだ手が伸びてきた。

その手は俺の顎を摑むと、ぐいと左上方を向かせた。今は痛覚が麻痺しているからいいものの、かなり強引なやりかただ。

それでようやく、俺は男の姿を見ることができた。

長身だった。見上げる角度のため正確には目測できないが、恐らく俺と同等か、二メートル近くはあるだろう。

しかし、それ以上のことは判らなかった。

何故なら、男は濃い群青のローブに全身を包んでいるばかりか、頭にはフードを深く被り、顔の前にも薄布のベールを垂らしているのだ。

「——ほう」

顎を摑んだまま俺の顔を見つめていた——ベールに遮られて目は見えなかったが——男は、そう呟くとやっと手を放した。

「助けた甲斐はあったな。知らぬ者ではない」

どうやらこの男は俺を知っているようだった。が、声同様この姿も、俺の記憶の中にはない。

館の炎は弱まっていた。すでに爆炎の呪文効果は消え、二次的に発火した普通の火が燃え続けているだけだ。

門の方向がざわざわと騒がしくなってきた。見物人が集まってきたらしい。

遠くで、衛士隊が人々を追い返す声と、高く響く呼び子の音が聴こえ始めた。

奇跡は起こった。今になってやっと、俺は神に祈る気になった。

目を閉じた時、ディーが俺の名を叫ぶのが耳に届いた。

（次号に続く）



あとがき

成沢大輔が結婚してしまった。それもあれよあれよというちに。

いや、考えて見れば随分前からそんな話は聞いてたんだっけ。どうも近頃時の流れが速過ぎる。

まるで、原稿を書いても書いても追いつかないかのようだ。すーぐ締め切りがやってくる。毎回遅れてりゃ、あ、こりゃ当たり前。

ま、それはともかくも、二十四歳で結婚しちゃうってのは早いよねえ。今のところ結婚の『け』の字も念頭にない僕としてはそう思ってしまうのだけど、そうでもないのかな。やはり二年しか違わない成ちゃんが所帯を持つというのは、なかなか考えさせられることでして。皆さんは、どうでしょう？

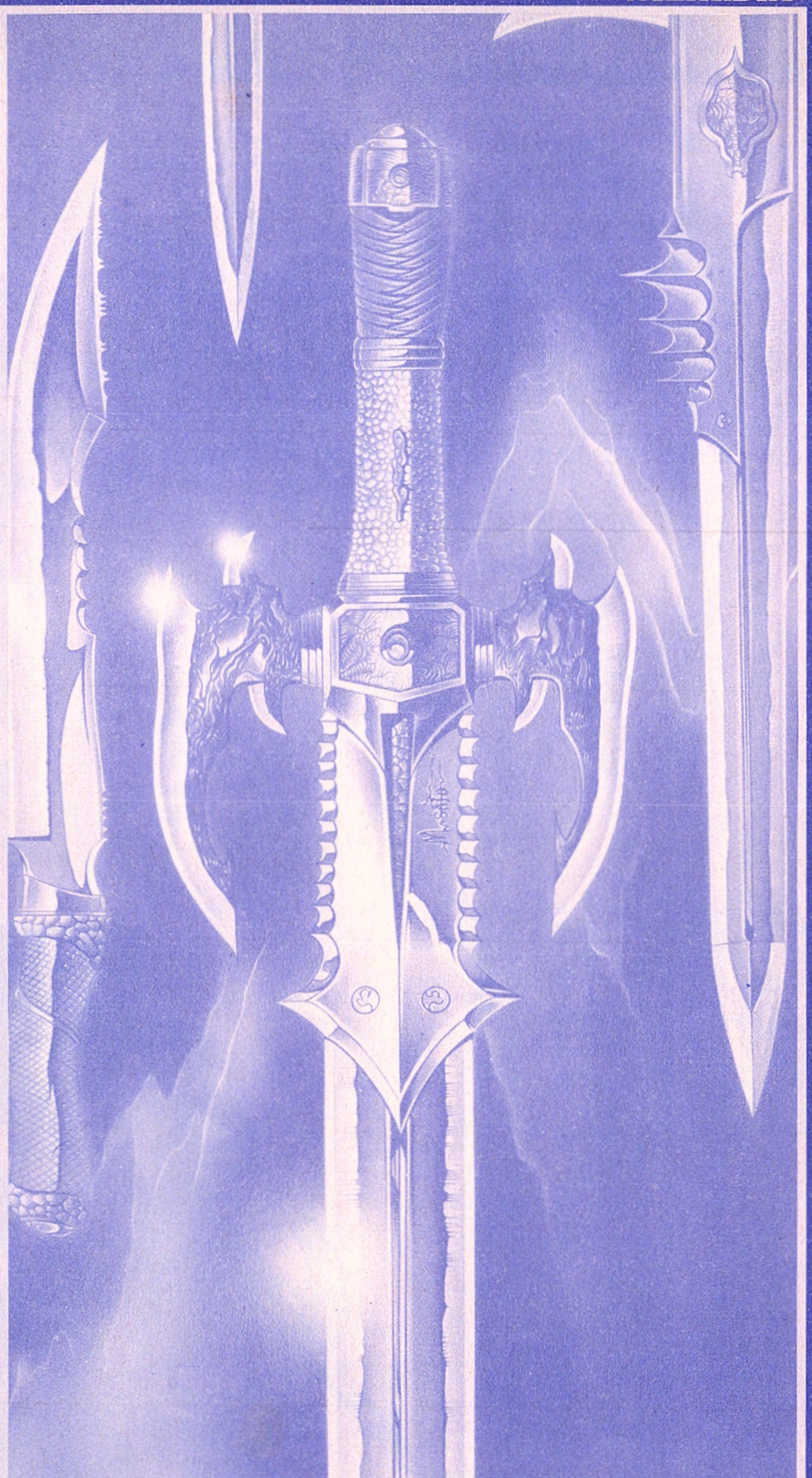
披露宴はと言うと、これは面白かった。ある人は「あれほど新郎が飲み食いした披露宴は初めてだ」と感動していたけど、全くその通り。だからこそ、成ちゃんらしい。

蜜月だけに今は遠慮しているけど、近いうちに新婚家庭にお邪魔しようと思ってます。お願いだから、昼間は仕事してね。

（ベニー松山）

特報!!
小説ウィザードリィ・シナリオ4「ワードナの逆襲」 手塚一郎・著
6月上旬単行本化決定!! 予約受付中!!

●本誌Vol.2号で別冊ふろくとして登場した同小説に大幅な加筆！新たなウィズ世界に御期待ください！



▶ファンタジーランドは
(P112)からお読み下さい。